IUIC 5

岩手大学 国際交流センター 報告

岩手大学国際交流センター 2009年7月

第5号

目 次

一論集一

多言語状況による問題解決型研修の試み		
―「国際合宿」研修フレームワークの有効性に関する		1
アジアの留学生と日本の近代	岡崎 正道	7
一教育部門 業務報告一		
日本語特別コース実施報告	Halinger French	17
日本語研修コース実施概要		22
全学共通教育科目		25
国際交流科目実施報告		27
夏季休暇および個別日本語補講報告		31
日本語・日本文化研修コース		33
日本語・日本文化研修生および短期留学生修了研	究報告	34
平成20年度外国人向け図書館説明会実施報告 -		35
地域日本語教育支援事業報告		36
一国際企画部門他 業務報告一		
平成20年度岩手大学 UURR プロジェクト報告		39
短期留学プログラムによる受け入れ・派遣		45
米国アーラム大学サイスプログラム関連事業報告		47
ヤングリーダーズ国際合宿研修 in IWATE		51
海外留学支援事業		53
海外派遣のための語学支援		56
国際交流センターの海外向け広報活動報告		61

キャンパスの国際化支援事業報告	66
危機管理マニュアル策定の取組み	68
平成 20 年度がんちゃん国際フォーラム開催報告	71
北東北国立3大学外国人留学生合同合宿研修会報告	75
平成20年度岩手大学留学生実地見学旅行実施報告	79
平成20年度岩手大学外国人留学生スキー研修実施報告	
岩手大学長と岩手大学外国人留学生代表との懇談会記録	
国際交流センター組織図	83
平成 20 年度留学生関連行事	84
外国人留学生集計表	
外国の大学との交流協定	87
平成 20 年度岩手大学海外派遣・留学プログラム一覧	90
平成 20 年度海外学生受入·派遣実績	91

岩手大学外国人留学生地域派遣実績一覧 ------

一資料一

多言語状況による問題解決型研修の試み

―「国際合宿」研修フレームワークの有効性に関する一考察―

松岡 洋子 尾中 夏美

0. はじめに

グローバル化が急速に進む現代社会には、環境問題、資源問題、食糧問題など特定の地域単独で解決することが不可能な課題が山積している。これらの課題を解決し、新たな社会を構築するためには幅広い視野からの思考力、行動力を持つ人材が必要となる。そこで、教育機関はこのような社会の要請に応えるため、国際通用性を有する人材育成に力を注ぎ始めた。

オーストラリアのビクトリア州で2009年3月に提出された教育指針では、「グローバルシティズンシップは、地球上の人々や環境との我々の相互の結びつきを自覚すること、またグローバル社会やグローバル経済への貢献を意味する」と定義し、生徒を市民(Civic and Citizenship)として育成するための学習スタンダードとして「生徒は、自らの価値観や権利、義務について批判的に検討し、社会の多様性について探求すること、異なる視点を探求した上で、自らの意見を表明できるようにすること、コミュニティーでの活動において自らの知識や技能を活用することが想定されている」という項目が提示された。このビクトリア州の教育目標は初中等教育レベルのものであるが、ここにある「批判的な検討」、「多様性について探求すること」、「異なる視点を探求」といった思考行動は、グローバル化が進んだ社会において必要な力であり、社会のリーダーとしてあるいは調整役としての役割を担う人材育成を目指す高等教育においても向上を図るべきものである。

岩手大学では国際的な視野から地域の課題解決を行う人材育成を目指し、教育の国際化プロジェクトが進められている。しかし、大学が教育の国際化を教育理念として掲げながら、そのために学生に提供されたプログラムは未だ限定的であり、ほとんどの学生は国際的な視野を持つ教育に触れる機会が少ないまま卒業している。その原因は、入学から卒業、就職までの過密なスケジュールの中で留学期間を確保する難しさ、経済的事情、語学力の不足などがある。このような状況を改善するためには、多くの学生が参加できるよう教育機会の多様化を図る必要がある。

そこで、新たな形態の教育プログラムの開発を目指し、2008 年度に「国際合宿ーヤングリーダーズ研修」を試みた。これは、異なる言語・文化を有する学生集団による学びのコミュニティー作りを通じた体験研修であり、さらに岩手大学の学生にとっては海外に出かけずに長期休暇を利用して多様な国の大学生と接触しながら視野を広げる機会となる。今回の試行プログラムには4カ国の学生が参加したが、日本語、または英語のいずれかの言語を通じて情報を共有し、意見を交換し、問題解決を図るという過程を経験した。本稿では、この合宿研修の概要を説明するとともに、学生の思考意欲を高めるための研修フレームワークの有効性について考察する。

1. 合宿研修の概要

合宿の参加者内訳および全体スケジュールは以下の通りである。海外の参加者には日本文化の理解を深める目的で、週末に二泊三日のホームステイプログラムを実施した。海外からの参加者でタイからの参加者の使用言語は英語に限られていたので、活動にあたっては日本語または英語で意思疎通ができるように活動グループの構成に配慮した。また、混合グループでのディスカッションは6グループで実施したが、宿泊時や「森と風のがっこう」での活動ではメンバーを組み換え、できる限り多くの参加者同士の交流が進むように工夫した。

実施期間 : 2009年2月19日~2月28日

宿泊場所: 国立岩手山青少年交流の家、「森と風のがっこう」研修施設

参加学生 : 中国 5名(寧波大学 2名 曲阜師範大学 3名)

韓国 6名(明知大学 3名 群山大学 3名)

タイ 4名 (サイアム大学)

日本 11名(岩手大学8名 盛岡大学 3名)

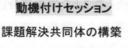
引率教員 : 寧波大学 1名 サイアム大学 1名 岩手大学 2名

具体的な研修スケジュール

日 程	活動内容
2月18日(水)	海外組盛岡到着。歓迎会。
2月19日(木)	アイスブレーキング。事前課題発表会。シミュレーションゲーム。
2月20日(金)	キーワードの整理。海外組ホームステイ開始。
2月21日(土)	海外組ホームステイ
2月22日(日)	海外組ホームステイ終了。グループ合流。食品に関わる消費者の意識調査 結果共有。
2月23日(月)	産直販売所視察。「森と風のがっこう」研修: 雪体験・施設の概要と理念の学習。
2月24日(火)	「森と風のがっこう」研修: 葛巻町垂柳集落にて地産地消の伝統食体験と歴史 についての学び。
2月25日(水)	「森と風のがっこう」研修終了。産直販売所視察。研修体験のキーワード整理。
2月26日(木)	「食と持続可能性」に関するキーワードの整理と体系化作業。国別グループに て各国における課題とその解決策。口頭発表準備。
2月27日(金)	口頭発表準備。口頭発表。送別会。

2. 合宿研修のフレームワークの意義

今回の合宿で学生たちに提示されたテーマは「食と持続可能な社会」である。しかし、参加した学生たちはいろいろな国の学生同士の交流が体験できることを目的とし、合宿のテーマにさほどこだわりはなく、このテーマについて深く考えようという意欲を持って参加した学生、この分野を専攻する学生は少数派であった。このような学生たちに対して、問題解決へ必要な思考およびコミュニケーション活動への意欲を高めるフレームとして以下の図のようなセッションに参加させた。それぞれのセッションを通じて学生を課題へ主体的に関与させ、自らが行動可能な課題解決方法を構築することを最終目標として行動を喚起した。このフレームでは、学生の主体性が鍵となるため、教員は指導者としてではなく、ファシリテーターとして関与した。



- ・共同体意識の構築
- ・課題に対する基礎知識注入
- ・課題に対する気づきの促し
- ・意見・知識の共有

体験セッション

課題への当事者性の醸成

- ・体験による認識の具体化
- ・現実に対する疑問の発見
- ・共同体での体験共有

統合セッション

課題解決への協働

- ・知識と現実の統合
- ·追加情報収集促進
- ·討論の客体化
- ・課題解決のための役割認識

図 研修活動のフレーム

また、セッションにより活動の形態を小グループ、大グループ、全体、と変化させ、それによって自らの所属する共同体に対する役割および帰属意識の変化を体験させた。動機付けセッションでは、4、5名の4カ国混合グループでの活動が中心で、疑似体験と討論を日本語と英語の複言語で行わせた。このセッションでは個々の学生には「〇〇国ではどうか」という質問に答える形で自国を代表する成員としての関与が求められる場面も見られた。体験セッションでは小グループ同士の作業と同時に、参加者全員が同時に活動に関与する機会が多く、自国人としてではなく「国際的な集団の一員としての自分」を認識する段階となった。さらに統合セッションでは、第一段階として参加者を大きく2グループに分けて知識と体験の統合を目的とした討論を行わせた。ここで、複言語による意見交換、調整が行われたが、個々の学生は意見集約作業で自らがどのように貢献できるか役割認識を深めた。第二段階では国別に分かれて最終的な課題解決プログラムの提案作成作業を行わせたが、これまで小グループ、大グループでの複数国混在状態で得た知見を自国集団に持ち帰ることによって、自国を客観視し、課題を多角的に検討させることにつなげた。以上のように、活動によって規模、構成員が異なるグループでの活動を体験させることで、学生個々のグループへの関与の仕方を変化させ、それぞれの場面で役割意識、思考の深化を学生自身に意識化させる機能が活動のフレームに組み込まれている。

3. 学生の反応から見た思考意欲にかかわる教育的効果

この研修のフレームがどのように機能したかを検証するため、参加学生に対してアンケートによる意識調査を行った。その結果、学生たち自身がこの研修への参加目的としていたコミュニケーション、あるいは交流という点での効果だけではなく、物事を多様な視点で観察し、そこから課題を見出し、それについて解決のための方策を立てるという過程そのものに対する関心の深まりが見られた。各セッションでの思考の変化について以下に述べる。

① コミュニケーション、交流に対する意識の変化

多言語状況におけるコミュニケーションについて、困難とその解決法、おもしろさに対する学生たちの 反応を見ると、共通言語を持たないこと、特に今回のグループでのマイノリティ言語である英語でのコミ ュニケーションに障壁を感じている。その学生も自身の母語以外の言語を使用する場面を経験し、不安 や不十分さを訴えている。このような困難を解決するため、1)辞書、非言語行動の使用、2)言い換え、 説明などのコミュニケーションスキルの使用、3) 通訳の介入要請、などの方策をとったことを学生自身は 認識している。実際のコミュニケーションを観察していると、コミュニケーションが挫折して議論の深化が 妨げられたり、話題を転換して挫折を回避したり、といった場面が観察されたが、最終的にはお互いの 言語を教えあい、学びあう行為が起こり始め、それについて学生はおもしろさを感じたようである。また 通常なら表面的になりがちな意見交換が、うまく言語化できないことによって却って深く議論することに つながったという予想外の反応も見られた。思考目的が明示されたコミュニケーション場面で「ことばが 通じない」という事実に対して学生たちは高いストレスを感じたはずであり、議論を継続させることをあき らめることが予想されたが、言語的困難さがコミュニケーションを阻害する要因としてではなく、議論を継 続させるための一種の動機付け的機能を果たしたのは興味深いことである。活動形態が単純な関係作 りから言語混在型小グループ、大グループ、そして単一言語の国別グループへと変化し、それに伴い、 動機付けから体験、そして課題解決へ向けてそれらを統合するという活動フレームを変化させたことが、 コミュニケーションの必然性を高め、コミュニケーション行動に対する関与への責任の意識化につながっ たことが予想される。

② 動機付けセッションにおける思考の変化

動機付けセッションの中心的活動としてシミュレーションにより「食と持続可能性」に関するリスクを誇張した形で提示し、意識化させた。このセッションの最後の段階では、シミュレーションから得た知見をキーワード化し、KJ法を用いてそれらを分類することによって学生たちの理解したことを整理させた。この活動の困難さについて、1)作業そのものが不慣れであること、2)課題に対するグループの成員それぞれの理解や視点に共通点が乏しいこと、3)基礎知識が不足していること、などが原因として指摘されている。学生たちは、分類、分析などのアカデミックな思考行動に不慣れであり、キーワードとしてあげられた各要素の階層や規模の差異に配慮せずに同列に並べたり、相互の関係性を捉える軸を発見できずに混乱したりする場面がどのグループにも見られた。ここでは、思考の混乱が見られ、学生自身は言語の障壁ではなく、思考そのものの不十分さに対するストレスを大きく感じていることが、「物事の区別が難し

い」、「原因と結果が混乱している」、「内容が漠然としてしまっていた」、「知識が深かったり、浅かったりした」、「グループ同士の関係性の近さを判断できない」などのコメントから窺うことができる。

③ 体験セッションにおける思考の変化

体験セッションでは、相互のコミュニケーションによる思考ではなく、体験に対する個々の思考の変化を中心的な課題とした。動機付けセッションで擬似的に捉えた研修課題について、「森と風のがっこう」での実地体験によって個別的、具体的に捉えなおし、それをまた抽象化するという思考過程が、現地での最後の振り返り作業の中で見られた。ここでは「循環」「維持」「継続」など持続可能性に対するキーワードや、「調和」「共生」「コミュニティー」「仲間」「役割」など人間同士のつながり、「意識」「価値観」など各自のあり方に関するキーワードが見られた。このセッションでは、討論、意見交換など、思考を言語化して整理する作業は少なく、学生たちは体験し、それを各自の意識の中で感じとることが中心的な活動となった。すなわち、論理的な思考を促す段階ではなく、研修課題について体験を通じて課題に対する当事者性を高め、学生個々の課題への関わり方を意識化させるためのセッションとして機能した。学生のアンケートでは、「持続可能性」、「共生」、「継続」、「再生」、「無駄」、「節約」、「保護」、「循環」など食の持続可能性に関する記述が目立っており、研修テーマについて体験から実感したことがわかる。さらに、「協力」、「調和」、「友だち」、「仲間」など、持続可能な社会の維持のために人間関係の重要性についての気づきが見られたことも特徴として挙げられる。これは、研修参加者同士が課題を共有する仲間としてお互いを認識しはじめた段階といえる。

④ 統合セッションにおける思考の変化

ここでは 2 種類の思考活動を経験した。ひとつは、国混在型の大グループでの課題理解のための討論であり、もうひとつは国別の課題解決型思考である。課題理解のための思考過程では、コミュニケーション上でことばの障壁がより深刻に現れる場面も多々認められたが、理解が浅い、あるいは理解の異なるメンバーに対して説明を加え、討論を喚起するなど、議論を深めるための学生同士の相互援助活動が急激に現れた。教員はこの過程で学生同士の議論の成果を逐次チェックし、理解の矛盾点を指摘し、再度思考するための枠組みに対するヒントを与えるなどの介入を行った。このような討論、報告、介入のサイクルを繰り返すことによって学生は思考活動の困難さと同時におもしろさを徐々に感じるようになった。「話せば話すほど難しくなった」、「本気に近い形で討論できた」、「いろいろなアイデアを意見交換できた」などの肯定的意見とともに、「時間が足りなかった」、「意見が合わないところがあった」、「まじめに考えないメンバーがいた」などの否定的な指摘も見られたが、これは、議論に対して真摯に向き合ったために出た意見である。

国別に分かれての討論に対しても同様の意見が見られるが、同国人同士になって議論がよりスムーズに進んだという指摘がある一方で、メンバー同士の関係性が硬直化したこと、多様な視点から議論が深まらなかったといった意見も見られたことは興味深い。特に、日本人学生の集団では、「自国の問題を遠慮なく話し合えた」、「意見の共有がスムーズにできた」という肯定的な意見と同時に、「意見がまとまらない」、「文句があるのにはっきり言わない」など、社会文化的な特徴を否定的に感じた学生も見られる。韓

国、中国の学生は国別で議論することで情報を共有していることが有効に働いていることを指摘している。一方、タイの学生たちは唯一日本語を理解しないグループだったこともあって、言語的な障壁についてコメントしており、最後のセッションにいたるまでに他の国の学生たちと課題に対する思考の深化が不十分だった可能性が窺えた。タイの引率教員の指摘によると、タイの学生たちは論理的に思考し議論することに慣れておらず、今回の活動に困難さを感じたということである。国によって、教育内容、方法が異なるため、今回の研修のフレーム機能は、その効果の深さや内容がかなり異なっていることが窺える。

4. まとめと今後の課題

本論では国際合宿を、活動フレームの意味とその機能から分析し、学生の思考的成長に対する機能について述べた。学生たちはこの研修活動中にさまざまな思考過程を経験し、より多様な視点を持ち、自身の、また相手の意見について論理的、客観的に捉えるようになった。アンケート中、「多様性を実感できた」、「自国や自分を見る視点が増えた」、「広い視野を持って課題を解決すべき」、「いろいろなことを深く考えさせられた」、「世界の問題とその解決方法などをいろいろ考えた」などの記述の中に、学生の思考過程の広がりを認めることができる。研修当初は課題に対して表面的な関わり方をしていたが、セッションを経るに従い、個々の実感として課題が捉えられるようになり、さらに議論によって論理的、客観的に課題を理解するに至り、解決する方向に思考が変化したといえよう。普段の授業では、知識を積み上げることが中心で、時間をかけて多様な情報や意見を検討する体験が少ない。今回の研修のフレームは、参加者の多様性、複言語状況、段階的な課題、多様な議論形態といった要素が思考を深める教育的装置として機能し、このような学習環境において課題に能動的に取り組ませることで学生の思考が活性化することが観察された。

しかし、学生がどのような教育を受け、論理的思考過程にどれほど親しんでいるかは個人差が大きく、 それぞれのセッションで意図された教育効果が十分に得られるよう、このような個別差に対する配慮が 必要だろう。たとえば、タイの学生たちは討論に慣れておらず、事実から得た情報に基づき自分の意見 を整理、表明することを躊躇する場面が見られたが、合宿に入る前の事前研修として情報収集とその分析、解釈の思考過程をより体系的に体験させておくことによって、討論がさらに深まることが予想される。 大学生としてより高度な思考過程を経験させるために、フレームの再構築およびより詳細な課題設定を 目指していきたい。

参考文献

マルカム・N・ノールズ・渡邊洋子監訳 (2005) 『学習者と教育者のための自己主導型学習ガイド』(明石書店) T・W・クルーシアス、C・E・チャンネル、杉野俊子他訳 ((2004) 『大学で学ぶ議論の技法』(慶應義塾出版会) Department of Education and Early Childhood Department (2009) *Education for Global and Multicultural Citizenship: A Strategy for Victorian Government Schools 2009–2013* (State of Victoria, Australia)

アジアの留学生と日本の近代

岡崎正道 岩手大学 国際交流センター

1. はじめに

2008年、福田康夫内閣のもとで「留学生30万人計画」なる国策が打ち出され、わが国のさらなる留学生受け入れ拡大の方針が明確となった。予定通り2020年にこの目標が達成されるかどうかは何とも言えないが、基本的な方向としては頷けるものである。

現在日本で学ぶ外国人留学生は約12万人、日本語学校等「就学」の資格で在留する学生も合わせると15万人ほどであるが、周知のようにその大半がアジア人学生、特に中国・韓国出身者で全体の3分の2以上を占めている。東アジアのこの両国との関係を抜きにして、日本の将来を展望することは甚だ困難であろう。政治・経済・文化などいずれの面においても、日中韓三国の密接な関わりは、今後も深まりこそすれ決して衰えることはなかろうし、またそうあってはならない。

ところで、この三国(これにアメリカとかロシアなどを加えてもよいが)の若者たちに「互いに相手の国をどう思っているか?」というアンケート調査を施すと、その多くの場合に、日本人が中国(人)あるいは韓国(人)を「好ましい」と思っているほどには、中国人や韓国人は日本(人)を好意的に見ておらず、はっきり「嫌い」と返答する者の割合も日本から両国を見る場合よりだいぶ高いという傾向が見られる。「韓流ブーム」などと言われ、いささか過熱気味でさえある日本人の「親韓」感情に比しても、韓国人の「親日」感情の度合いもかなり冷めたものである。日英共同の世論調査(若者だけが調査対象ではないが)で、「世界に良い影響を与えている国」として日本が3年連続トップになったにもかかわらず、その中で中国および韓国の日本に対する評価だけは極端に低かった、というデータもある。(注1)先日急死した盧武鉉(ノムヒョン)元大統領の政権下では、かつての「日帝36年」の植民地支配の時代に日本に協力的な態度を取った人々(親日派)の「罪業」が改めて糾弾され、彼らがそのことで得た利益は現在存命の子孫たちから没収するという、普通では考えられないほど強硬な「歴史の清算」が断行された。

中国では2005年春、小泉純一郎首相の再三にわたる靖国神社参拝に憤激した民衆がついに爆発、各地で反日の嵐が吹き荒れる騒ぎとなった。あの時、岩手大学に在学していた中国人留学生たちが示した複雑な反応を、私は忘れることができない。地元の新聞社から「今回の反日運動について、意見・感想を述べてくれる中国人学生を紹介してほしい」と依頼され、何人かに当たってみたが、普段なら大抵のことには応じてくれる彼らがこぞって、「折角ですが、この問題にはコメントしたくない」「岡崎先生の頼みなら何でも聞くけど、この件だけはご勘弁を」と断わり、私も非常に困惑した。辛うじて農学部の男子学生(北京出身)が「(今回の騒ぎは)一部の人に煽られているという気がする。冷静に物事をとらえ、相手を理解する必要がある」と実名でコメントし、ハルビン出身の女子学生(匿名)は「日本で反感が高まっていないか、安否を気遣い母が電話をくれた。日本への留学希望者は多いので、影響が心配だ」とや

や暗い表情で語った。(注2)

何かの政治的な事柄がきっかけとなって時々噴出するこうした「民族感情」は、留学生問題にも決して無縁とは言い難い。日本の大学等で学ぶ留学生たちは大概、日本の中で極力日本人との摩擦は起こしたくないと考えるから、この種の「感情」の表出には努めて抑制的であろうとするだろう。たとえ心中に反日的な思いを抱いていても、それを毛ほども見せないように振る舞う者も多い。「反日運動」に対するコメントを拒否した学生は、あるいはあの時の「反日活動家」に多少なりとも同調する気持ちを有していたのかもしれない。もしそういう気持ちが全然ないならば、「ああいう騒ぎを起こしても無意味、バカなことだ」といった談話を残してもいいはずなのである。

それではわれわれ留学生教育に携わる教師は、この種の問題に鈍感であってよいであろうか? 否、中国あるいは韓国出身の留学生が日本との歴史的、政治的な問題にあえて触れないからと言って、また何か両国間の軋轢などが生じた際にも彼らがそれについての論評をさし控えているからと言って、彼らが何も知識を有せず、デリケートな感情をいささかも抱懐していないなどとは、ゆめゆめ考えてはいけないであろう。

逆にこれらの国の留学生の側から、「韓国人にとって忌まわしい侵略者である豊臣秀吉が、なぜ日本 史上の英雄として今も讃えられているのか?」とか、「韓国の植民地支配を推進した中心人物である伊藤博文が、近代日本建設の功労者であるとはどういうことか?」「1950年代の朝鮮戦争における経済特需のおかげで、戦後日本の高度成長は実現したのですよね」といった歴史「事実」を突きつけられた時、日本人教師として返答に詰まってしまうということはないだろうか?「ライジングサン」という映画で、原爆投下の場面を見たマレーシア人観客が一斉に大きな拍手をしたなどという話もある。(注3)「南京大虐殺事件」「従軍慰安婦」「靖国神社参拝」といった問題を中国人学生が鋭く突いてきた時、日本人として一体これにどう対応すればよいのだろうか?

「私は日本語の教師なので、そういう歴史的なことはよくわからない」もしくは「この授業では、そういった微妙な問題に立ち入ることはお互いに避けましょう」などと逃げるのか、「とにかく昔の日本は侵略戦争など、悪いことばかりしてきた。お詫びします」と言って、ただひたすらに低頭するのか? 私には、いずれも賢明な対応とは思えない。より望ましいのは、こうしたシリアスな問題に答え得る、あるいは少なくとも彼らとともに考え討議することができるだけの知識と認識とを日頃より蓄積し、感覚を練磨しておくことであろうと思われる。

2. 「反日」の底流

前章で提示したような「反日」的な言説の多くは、主に明治維新後の近代日本とアジア、就中中国・韓国(注4)との歴史的関係に根差すものであると言ってよいであろう。16世紀末の豊臣秀吉(1536-98)による朝鮮出兵も、400年以上を経た現在もなおある種の史的ルサンチマンとして韓国人の民族感情の中に残存しているが、こういったはるかに遠い過去の歴史はどこかで思い切って截断しないと、「モンゴル人の侵攻に脅える東ヨーロッパ」といった話柄が半永久的に蒸し返される始末となる。

問題の核心はおそらく、次のように集約できるであろう。(韓国にとって憎むべき豊臣氏を討滅した)徳

川政権の時代に「朝鮮通信使」(注5)などを通して極めて友好的な関係を保持していた日本、同じ東アジア儒教文化圏にあって共に中国(中華帝国)を範と仰いだ日本が、徳川幕府を打倒して新政権を樹立するや、国策を180度転回させて欧米流の「近代化」へと舵を切り、儒教的華夷思想の観点からは「夷狄」として軽侮すべき西洋の諸「蛮国」に追随して東洋的「道義」を放擲し去ったのみならず、韓国にまでそうした西洋流近代化のための開国を迫ってくるという理不尽さに、韓国民たちは明治初期(1870年代)の激しい反日運動をもって応じた。日中韓三国の歴史的関係を図式化すれば、いわば中国が父親で日本と韓国は子ども、それも韓国が兄で日本が弟という立場に当たると言える。少なくとも江戸時代の終わりまでは、儒教と封建制度(その内実には三国それぞれに特質があり、全く同じではなかったが)を共通の価値とする「東アジア共通の家」的な意識が三国の国民および支配層の間の底流に流れており、アヘン戦争・アロー戦争に敗れた中国(清国)が西洋の科学技術導入に漸く重い腰を上げ出した「洋務運動」(注6)の時代(1860~70年代)においても、かの国は旧体制の改廃にまでは至るつもりがないのに対し、日本が科学技術だけでなく政治システムにまで西洋流を移入しようと図ったことは、「日本は西洋の猿真似をする恥知らず、東アジアの裏切り者」とする嫌日の感情を、中国や韓国に根強く植えつけてしまった。

とはいえ、イギリス・フランス・ロシア・アメリカ等西洋列強の魔手は東南アジアから東アジアにまで伸びつつあり、否応なく何らかの改革の断行は不可避という認識は中韓両国の指導層にも当然ある。清国の洋務運動はその端的な現われであり、韓国でも徐々に改革派の台頭が見られるようになる。そしてその過程で、近代化を進展させつつある日本の影響も自然に及んで来ざるを得ない。「裏切り者」日本に対する嫌悪感と、にもかかわらずそこから何がしかを学ばねばならないという悔しさと羨望、この極めてアンビバレントな感懐を知らずして、19世紀後半からの日中韓の複雑にして微妙な関係を正しく把握することは困難である。

「確かに日本は中国や韓国に随分迷惑をかけ、被害も与えたが、それは西洋諸国がアジアやアフリカの植民地に対してやったことと同じではないか。いや、日本は韓国のために学校を建設して近代的な教育を施したり、インフラの整備等にも相当努力して彼らを助けてあげた。イギリスやフランスがインドやインドシナで行なったことに比べ、日本は植民地にも多くの益を与えたはずだ。現に台湾では、多くの人々がかつての日本の統治に感謝さえしているではないか。どうして、韓国人からはいつまでも反感を受け続けなければならないのか?しかも欧米諸国は、かつての植民地支配についてほとんど謝罪も反省もしていない。何ゆえ日本だけが、かくもたびたびお詫びをし続けねばならないのか?」自民党などの政治家がこの種の発言をして韓国あるいは中国の猛烈な反発を招き、日本政府は慌てて釈明と謝罪に追われるということが、これまで幾度となく繰り返されてきた。これらの発言者は、なるほど事実としてはそれほど間違ったことを語っているわけではない。封建の圧政に呻吟していた民衆が、日本の「支配」によってむしろ何がしかの恩恵をこおむった場合もあるというのも、ある程度は事実であろう。イギリス・フランスなど西洋列国がインドや東南アジアでどれほどの非道を働いたか、アフリカ大陸の人々に対してはこれをほとんど人間扱いしなかった、という歴史的事実もよくわかっている。にもかかわらず、インドで「イギリスは東インド会社以来の支配を詫びよ!」とか、アフリカで「ヨーロッパ諸国が我々に対して重ねた罪は、断固として許さぬ!」といった抗議・批判の運動が起こったというような話をあまり聞かない。私もケニ

ア出身の留学生から「かつてのイギリスの支配に対し、特に反発は感じない。国内でも、そういう声はほとんどない」という話を聞き、またベトナム人学生からは「ベトナム人は昔の宗主国フランスをさほど恨んでいないし、ベトナム戦争で猛烈な爆撃を加えたアメリカにさえ今では特に反感を覚えない。どうして中国や韓国では、日本の侵略や植民地支配に今でも腹を立てているのか、理解しがたい」と言われた。上記の自民党政治家諸氏らが聞いたら大喜びしそうな話だが、ここで決して思い違えてはいけないことがあると思う。

それは、インドや東南アジアあるいはアフリカ諸地域にとってイギリスやフランスなど西欧列強は、それまでの歴史において特に親密な関係性を有せず、突然遠方からのインベーダーとして眼前に現われ、圧倒的な実力をもって侵し奪い取り支配を強行していったということであるのに対し、中国・韓国に対する日本は、それこそ有史以来深い関わりを持ち、しかも日本が中国という親分および韓国という兄貴分から政治・思想・文化等の様々な面で多大なる影響と恩義を得続けてきた関係にある、ということである。いきなり襲来した外敵による侵奪であれば、やがて独立を回復した後はこれを水に流すことも可能であろうし、かえって親しい間柄となることさえあり得る。しかし、長い間友好と情誼によって結ばれてきた相手、しかも子分・弟分の立場にある相手から、あたかも手のひらを返すかのごとく「我らは旧体制を廃し、古い上着も脱ぎ捨てた。あなたたちもいつまでも旧制に固執していると、国を誤るぞ。今度は我らが指導してやるから、よく言うことを聞いて近代化を推進せよ」と傲慢かつ恩着せがましく「助言・指導」をなされたら、一体どうであろうか?素直にこれに従う気持ちが起きにくいばかりか、むしろ反感を抱く結果となるのも無理はないではないか。先の自民党政治家の発言には、この点に対する配慮とデリカシーが決定的に欠落しているのである。

そこでやはり問題なのは、近代化政策を先行させた日本の中韓両国に対する姿勢である。即ち欧米の優位する科学技術文明を学び日本の近代化を進行させながらも、あくまで東亜の一国としての立地点を忘却せず、中韓に対しても決して居丈高に構えることなく両国との友誼の堅持をより優先する一そのためには近代化をあまり急がず、中韓両国の改革にも懇切な助言・助勢は加え根気強く待ち続ける一という余裕ある姿勢が日本の指導層の中に見られたなら、拙速な富国強兵路線は抑制され、東亜三国の対欧米連携というコースも選択され得たはずである。西郷隆盛(1827-77)の所謂「征韓論」(注7)や勝海舟(1823-99)の「日韓支合従論」(注8)はそうした視座に立つ策論であったろうし、横井小楠(1809-69)の「高調子な思想」(注9)もまた同様の論脈で捉えることが可能である。

しかしながら、こうした路線は急速な富国強兵型近代化を強引に推進する大久保利通らの政策によって排斥され、それに伴って中韓両国との摩擦・葛藤も避けがたく昂進していく。このような近代化の進展の過程を象徴する思想家として、我々は福沢諭吉(1835-1901)を挙げることができるだろう。それゆえ次章では、福沢諭吉の思想について、彼の朝鮮問題への認識を中心に少しく考察してみたいと思う。実は現代の日本人の対外国人観にも、福沢流の観念が相当に根づいていると考えられ、福沢の思想を考究することは、外国人と日常的に接する立場の人間にとって少なからず参考にもなるものだからである。

3. 福沢諭吉の対外観

福沢諭吉は現在1万円札の肖像画で毎日のように目にし、留学生も多くが知っており、国際的にもかなり著名な人物と言える。彼は豊前国・中津藩(現大分県)の下級武士の子として生まれ、牢固たる門閥制社会に疑念と憤りを抱きながら成人したが、やがて長崎や大坂の適塾で蘭学を学ぶ中で、自由闊達な精神を養っていった。そして、1860年の咸臨丸による渡米とその後二度の欧米遊歴を経て日本でも有数の西洋通となり、慶応義塾を創設して教育事業も本格的に進めていった。

西欧歴訪から帰国後に著しベストセラーとなった『西洋事情』の中で、福沢は欧米の歴史や政治・経済・教育等の諸事情を幅広く紹介し、それによって「漢儒者流の頑僻固陋の鄙見」(注 10)を打破しようと試みた。この著作の中では、西洋諸国において民衆の福利のため有益な施策がいかに行なわれ、また自由や権利等の保護が徹底してなされているかが詳述される。彼は幕末の政争にはあくまで中立傍観の立場を取り、明治新政府成立後も出仕の要請を固辞し続けたが、基本的には廃藩置県による封建割拠制の廃絶と文明開化・殖産興業・富国強兵の国家建設路線を支持し、『学問のススメ』『文明論の概略』などの旺盛な著述によって、一般大衆への啓蒙活動に絶大な役割を果たしていった。即ち『学問のススメ』では、普遍的人間平等観を高らかに宣言して封建イデオロギーを粉砕し、「一身独立して一国独立」するための基礎としての実学の重要性を強説した。資本主義的合理主義の観点から、陋習より解放された自主独立の精神を鼓吹するその主張は人々に絶賛され、自由主義思想のチャンピオンとしての名声は奔騰した。

福沢の対外観を検討する上では、やはり『文明論の概略』が重要である。同書のモチーフは、現実の世界をリードする西洋列国と後進国たる日本の文明の等差がどのようにして発生するのかを解き明かし、もってこの先日本が列強に伍していくために不可欠な近代化の確固たる方針を究明するところに、その主眼は置かれていた。文明開化が叫ばれる時勢の下に、福沢は欧米のような「文明」国とアジアの「半開」国そしてアフリカ等の「野蛮」国という範型を立て、「人間の目的は唯文明に達するの一事あるのみ」(④59)という視点から、野蛮→半開→文明という歴史進歩の行程を指し示した。

いかに古い歴史と伝統を有する国でも、独裁専制の政治により「自由の気風」が甚だしく抑圧されるような体制下では、国民の精神的自立とそれを基盤とする国家の独立発展は望み得ず、結果としてアジアの諸邦が欧米の支配に屈従を余儀なくされるような事態に立ち至る。その典型を、インドに見ることができる。

世界中何れの人民にても、古習に惑溺する者は必ず事の由来の旧くして長きを誇り、其連綿たること愈久しければ、之を貴ぶことも亦愈甚し・・・印度の人はこの貴き典籍を守りこの旧き国風を存して、高枕安眠の其間に政権をば既に西洋人に奪はれて、神霊なる一大国も英吉利の庖厨と為り・・・英人の奴隷と為れり。(①43-44)

頑迷守旧の停滞性が国勢の進運を妨げ、ついには帝国主義の餌食にもなりかねない現実の苛酷さを 痛論する福沢は、皇統連綿たる国体をもって国史の精華と讃えてやまぬ水戸学や国学の流儀を「人民、 神政府のために束縛を蒙り、活発の気象を失ひ尽して蠢爾卑屈の極度に陥りたる」(同前)宿弊を生む 根因として弾劾する。欧米の発達した文明をも無条件に賞美せず、相対主義の視点を強調する福沢は、 封建的性向の強い日本精神を温存したまま単に科学技術のみを吸収せんとする採長補短主義、「和魂 洋才」主義を明確に拒否したと言える。

儒教道徳を厳しく批判する福沢には、為政者の心徳と愛民感情に基く徳治主義の限界を指摘して国民の能動的社会参画を促そうとする論調が濃厚で、その意味で彼は紛れもなく「近代的」思想家の名に値すると言える。だが、そうした理念的思考と容易に無知蒙昧の状態を脱し得ぬ日本人民の現状とを比べるとき、その革新的啓蒙主義は徐々に後退し、自由民権運動の高揚に対する彼のクールな見方、即ち結局同運動の主導権は士族が掌握し、民衆は彼らに従属して引き回されるかもしくは一揆に暴発するのみという状況への痛憤なども相まって、福沢の思想は、民衆への啓蒙より民心の操作而して国家主義への追従というように大胆な変貌を遂げていく。

日本人に対してさえいささか冷めた眼で見ていた福沢が、儒教精神が根強く残り封建体制が強固に維持された中国・韓国に対してなおさらに厳しい認識を示すのは、ある意味では避けがたいことであったろう。明治10年代の激動する国際情勢、就中日本を取り巻く極東情勢の変化に対し、福沢の対外論はかなり硬論の色彩をおびることとなる。「一身独立して一国独立」を至要の命題として掲げた福沢であるが、西洋列強の侵略による植民地化の危機が一応遠のき、受動的国防からむしろ積極的対外進出が叫ばれる過程、即ち1873年の「征韓論」政変から75年の江華島事件(注11)そして壬午・甲申事変(注12)と続く一連の対朝鮮問題と、それに伴なう清国との確執という事態の変移の中で、彼の思考はいよいよ現実政治に近接した国権主義・覇権主義的な性向を強めるようになっていくのである。

1868年慶応義塾を開設して新時代の教育事業を本格化させた福沢は、少なくとも1880年の頃までは、日中韓の三国が連携して西洋列強の東亜侵攻に対抗しようとする思想を多分に有していたと見られる。韓国の青年活動家、魚允中・柳正秀・兪吉睿らを慶応義塾に留学生として受け入れ、開明派の指導者たる金玉均・朴泳孝らに対しては、長きにわたり物心両面に至る大きな援助を与え続けた。かつて封建の因習に呪縛されていた日本がこれを脱して西洋文明を見事に受容し得たように、韓国においてもまた守旧派を打倒した後に日本の支援と指導のもとに近代的改革が推進されていく姿を、福沢は待望していたに相違ない。しかし横井小楠のように儒教的普遍主義に一顧の価値をも見出せず、儒教をひたすら封建イデオロギーとして唾罵した福沢は、アジアにおける苛烈な帝国主義的争覇の現実の下で「和親条約と云ひ、万国公法と云ひ、甚だ美なるが如くなれども、唯外面の儀式名目のみにして、交際の実は、権威を争ひ利益を貪るに過ぎず」(①57)という極めて冷徹な認識に基く、政府の対外的富強策の追認へと転じていったのである。

ここから、「脱亜論」に見られるアジア経略論は導かれてくる。「日本は強大にして、朝鮮は小弱なり。 日本は既に文明に進みて、朝鮮は尚未開なり」(⑦126)という基本的視座に立って、福沢は韓国に対 するかなりあからさまな内政干渉を唱え、しかもそれを「日本自国の類焼を予防」(⑦129)するための方 策だと正当化する。さらに『時事小言』『東洋の政略果して如何せん』等の論著では、弱肉強食の国際 関係を前提にして、日本の生き残りのための軍備強化而して大陸唱覇といった、露骨なまでの対外硬 論が展開されるのである。

我東洋の政略は結局兵力に依頼せざるべからず、兵力を足し軍備を拡張するには資本なかるべからず。 其資本の出処日本国民にして、国民は苦楽の応報を勘弁して納税の義務を担当し、以て 後年の快楽を期すべし・・・軍備は今日燃眉の急にして、(国会開設の)二十三年を待つべからず。 (⑦149)

自由民権運動に対する福沢の酷薄な評価は、彼の民権から国権へのスタンスの移動とパラレルであり、それはまた明治国家の富強政策の展開による大陸進出の現実化と見事に照合しているとも言える。

「脱亜論」は、親日開明派政権を崩壊させた壬午軍乱から金玉均ら独立党の反撃の蹉跌(甲申事変)を経て、日本による朝鮮改革の失敗が明白なものとなった段階で書かれている。

我日本の国土は亜細亜の東辺にありと雖も、其の国民の精神は既に亜細亜の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。然るにここに不幸なるは近隣に国あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二国の人民も古来亜細亜流の政教風俗に養はるること、我日本国に異ならずと雖も、其人種の由来を異にするか・・・其の古風旧慣に恋々するの情は百千年の古に異ならず・・・外見の虚飾のみを事として、其の実際に於ては真理原則の知見なきのみか、道徳さえ地を払ふて残刻不廉恥を極め、尚傲然として自省の念なき者の如し・・・左れば、今日の謀を為すに我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予あるべからず。寧ろ其の伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に従て処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我は心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。(⑦223-224)

古代以来親密なる歴史的関係を有する中国・韓国の両国を「悪友」と呼び、これと「謝絶」することを 日本にとっての良策だと主張する福沢は、ここに東洋的道義の一切をかなぐり捨てた冷酷な帝国主義 者へと変貌を遂げたのであろうか。無論、福沢を大陸侵略のイデオロギー的先導者と糾弾する見解も、 あながち不当とは言い難いものがある。

しかし、そこまで福沢を貶める見方に、私はくみしたくない。「門閥制度は親の仇」(『福翁自伝』)と言い放ち、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」(『学問のススメ』)と叫んだこの先進的思想家の脳中には、儒教道徳と旧制度に全身つかり切り、人民の創造性も社会の進歩も抑圧して弱体化していく老醜国家の無残な姿が、許容しがたい存在として映じていたに相違ない。大いなる期待をこめて支援を施した韓国の親日改革派勢力が、清国の介入によって脆くも挫折に追い込まれた時、福沢の失望と憤懣はその頂点に達したことであろう。アジアの先進国家日本の助力による中韓両国の近代化、この観点から福沢は日清戦争を「文野明暗の戦」即ち「野蛮国に対する文明国の正義の戦争」と捉え、勝利のための軍費調達への協力さえ行なったのは、封建反動の圧政に苦しむ民衆が自ら国家改造をなし得ぬ時、純粋な善意に基く他国の介入は許されると信じてのことに違いはなかった。

さて翻って現代の日本人の標準的な対外国人観を省察してみると、案外この福沢流の観念が根づいていると言えるのではないであろうか。封建門閥制を否定した能力第一主義や自由と創造の精神の高唱を核とする福沢の思想の、もう一方の重要な側面である脱亜入欧の意識は、1930~40年代「脱亜超欧」を試みて敗れた日本人の心中に、特に戦後再び蘇っているように思われるのである。

4. むすび

日清・日露両戦役を経て「帝国主義」国家へと飛躍した日本のその後の歴史の歩みについては、紙幅の制約があるゆえ詳述しない。ただ、日露戦争でアジアの小国日本が勝利したことに、アジアの諸地域で多くの民衆や指導者が歓喜したのは事実であり、この時期清朝打倒の革命を目指す中国から、またフランスの植民地支配からの独立を求めるベトナムから、多くの青年が留学生として日本の土を踏んだ。中国人青年・学生らは孫文・黄興らを指導者とし、また宮崎滔天など日本人同志の熱い援助を受けながら、東京で「中国革命同盟会」を結成し、ベトナム人青年・学生たちは独立運動の闘士ファン・ボイ・チャウの「東遊(ドンズー)運動」に共鳴して、日本を闘争の拠点と定めた。アジアの新興国家日本は、彼らにとってまさに希望の星であった。明治維新を、西洋列強の支配への抵抗そして近代化を進める民族主義革命の偉大な成功事例として評価し、自分たちが取り組むべき闘いのモデルとして賞賛したアジアの若者たちは、大きな期待を抱きつつ来日し、日本で多くのことを学ぼうと努めた。1900~20年頃に日本で学んだ中国人留学生の中から、中国の改革・革命、近代中国の建設に大きな功績を残した幾多の人物が生まれた。

だが、その後のアジアとの関わりの過程で、日本が「初志」を忘失して彼らに対する支配者・抑圧者ひいては侵略者へと転落していったことは、遺憾ながら否定しがたい歴史事実である。とはいえ、その過程(20世紀前半)においても、日本人のすべてがそうだったわけでは勿論なく、日本の国策のすべてがアジアに対する加害行為だったと決めつけることも無論できない。ならば、どこで誰が何をどう誤ったのか、そして果してそれは避けることのできない道であったのか、一つ一つの歴史事象と人間の行ないを具さに検証していく作業を、我々は決して厭うべきではないであろう。その作業は、さらに今後の研究課題として掲げておきたい。

留学生教育に携わる我々が今相手にしている、主に1980年代生まれの若者たちは、それぞれの国で21世紀前半の指導的立場に立つことになるであろう人々である。第二次世界大戦と日本の敗戦から100年という節目の時期(2040~45年頃)に、国のリーダーとして大きな働きをなす可能性も有する人々である。その頃の日本と中国・韓国の関係がどうなっているか、そもそも東アジアの地図がどうなっているかさえはっきりとは予測できないが、少なくとも過去の不幸な歴史を真に「清算」し、共にアジアの未来を語り合える友好的なパートナーでありたいとは思う。そのための種まき人の役割が、我々には課せられているのだろうと思う。

(注1) 2008年4月2日、読売新聞社と英国BBC放送共同世論調査

この調査の結果では、日本はドイツなどと並んで「世界に良い影響を与えている」ことを高く評価されている。ちなみに「悪い影響を与えている」国としてはイラン・イスラエル・パキスタン・北朝鮮などが上位に並び、アメリカも「良い影響」より「悪い影響」のほうが大きいと厳しい評価を下された。

日本は全体では、「良い影響」56%を得る一方「悪い影響」は21%にとどまったのだが、中国からは「悪い影響」55%、韓国からも同52%という、極めて低い評価を与えられた。これが多分に両国内の根強い「反日感情」に起因するものであることは、明らかであろう。

- (注2) 2005年4月16日付 岩手日報朝刊
- (注3) 歴史教育者協議会編『日本歴史と天皇』(1989年、大月書店)311頁
- (注4) この場合の「韓国」とは朝鮮半島全体を指す概念で、正確には「南北朝鮮」あるいは「韓国および北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)」と書くべきなのであろうが、煩を避けるためあえて「韓国」で通すこととする。これは、現在我が国と北朝鮮との間に国交がなく、北朝鮮国籍の留学生も来ていない(少なくとも表向きはそういうことになっている)という現実を踏まえてのことでもある。また留学生ではないが、在日コリアンの学生の「韓国籍」or「朝鮮籍」という厄介な問題も存在するが、これにも本稿では言及しない。
- (注5) 広義には、室町時代の1429年から江戸時代の1811年までに計17回来日し、豊臣政権期 にも2度来ている。しかし大規模な通信使派遣が継続的に行なわれたのは江戸時代のことで、 日朝両国間の親交と文化交流に大きな役割を果たした。
- (注6) 穆宗(同治帝 1861-74)の治下に推進された改革(同治中興)の背景をなす近代化の運動で、 曾国藩・李鴻章ら清朝官僚が中心となって推進。軍需工場設立、外国語学校の設立、海外 留学生の派遣、西洋科学技術書の翻訳、軍幹部養成学校の設立、造船・鉄道・紡績等の工 場建設などを進めたが、その根本は「中体西用」、即ち中国の伝統的政治体制と精神文化を 堅持したまま西洋の技芸のみを導入しようとするもの(日本の「和魂洋才」に類似)であったか ら、幕藩・封建体制を廃絶した日本とは異なり、そこにはおのずから大きな限界が存したと言 える。
- (注7) 西郷隆盛は、新政府の近代化政策によって従来の特権を奪われた士族層の不平を代弁し、 外征による局面の打開、具体的には明治初年の大きな外交問題である対韓関係紛糾を一挙 に解決する方策として「征韓論」=朝鮮征討論を唱え、国内改革が先決だとする岩倉具視・大 久保利通ら「内治派」と対立したというのが今も見られる「通説」である。しかし毛利敏彦氏らの 研究で、この「通説」は批判されている。即ち西郷は「征韓」ではなく「遣韓」使節役を強く望ん だのであり、その真意は征韓の口実作りのために韓国で殺害されることではなく、何よりも平和 的交渉の貫徹とその成算にあり、板垣退助への征韓使嗾的発言は、真実強硬論者であるこ の同志へのいわばリップサービスにすぎないというのである。私も、この見解に基本的に同感 である。西郷には、欧米列強の後進国家に対する非道な植民地政策を普遍主義的文明観に よって非難する強い意識が見られた。西郷にアジア侵略の先導的役割を見出すことには、ど うしても無理が伴なう。
 - (注8)「海舟日記」文久3年4月28日(『海舟全集』第9巻)
 - (注9) 横井小楠は西洋文明の優越した成果は大いに評価しつつ、その帝国主義は激しく批判した。 一方徳川幕府の積年の政治に対しては、国家人民を豊かにすることを忘れて専ら権力の維持にのみ耽ってきたと厳しく弾劾する。日く「幕府の制度・・・権柄により徳川御一家の便利私

営にして、絶えて天下を安んじ庶民を子とするの政教あることなし」(「国是三論」)だが横井の優れた眼識は、西洋式の近代化が戦争の惨禍をもたらす危険性をも鋭く見抜いていた。「西洋の学は唯事業の学にて・・・西洋列国戦争の止むべき日なし」これを避けるためには堯舜の王道政治を実現させる以外にないと、彼は考える。そして、それを果たすことこそ日本の至要な責務だと言う。有名な「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くす。何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん。大義を四海に布かんのみ」(「甥の左平太・大平に送る詩」)は、まさに東洋的道義と西洋文明の有機的結合を果たさんと模索した、横井の思想的結語であった。この横井を、勝海舟は後年次のように評した。「俺は今までに天下で恐しいものを二人見た。それは西郷と横井だ・・・横井の思想の高調子な事は、俺などはとても梯子をかけても及ばぬと思ったことがしばしばだったよ」(『氷川清話』)

- (注10) 『福沢諭吉選集』(岩波書店)第1巻101頁(以後、同選集からの引用は「①101」と略記することにする)
- (注11)「征韓論」政変で西郷・板垣らが下野した後、明治政府は日本との外交関係樹立を拒む朝鮮に対する軍事的示威を一層強化した。そして1875年9月、日本海軍の軍艦雲揚による 江華島水域侵入に対する朝鮮側の砲撃を誘発してこれに応戦、翌76年強引に日朝修好条規を締結させて朝鮮を開国させた。
- (注12) 大院君一派を退け日本にならった軍制改革を進める閔妃政権に対し、1882年7月朝鮮の 首都・漢城(ソウル)で兵士・下層市民による反日暴動・反乱が勃発。日清両軍が出兵し、 大院君を天津に引致。済物浦条約で日本は朝鮮における軍隊駐留などを認められる一方、 清国は朝鮮支配の宗主権を強化、日清両国の対立が深まった。そして1884年12月、親 日・開化派の金玉均・朴泳孝ら青年官僚(独立党)は、親清保守化を強める事大党・閔妃政 権に対する反撃を試みた。(甲申事変)しかし清国軍の反攻を受けて敗退、金玉均らは日 本への亡命を余儀なくされた。

日本語特別コース実施報告

1. 概要

日本語特別コースは日本語能力の向上を目指す全学の外国人留学生が対象の補講授業である。定員に余裕のある場合には研究員およびその家族も受講が可能である。初級、中級レベルの授業では、国際交流科目または特別コースとして履修する学生が、上級レベルの授業では全学共通教育科目または特別コースとして履修する学生とが同じ授業に参加している。

2. 受講までの流れ

受講希望者は、毎学期はじめに実施されるオリエンテーションへの参加が義務づけられている。オリエンテーションでは英語および中国語の通訳を介した説明を行っており、今年度も昨年度に引き続き国際交流センターの尾中教員(英語)、早川教員(中国語)の通訳協力を得た。オリエンテーション終了後に、工学部三輪教員開発によるオンラインプレースメントテストを実施した。

<前期>

4月4日(金) 13:30-15:00学生センターG37(CALL教室)参加者 20 名4月9日(水) 13:30-15:00同上参加者 6 名

<後期>

10月3日(金)13:00-15:00学生センターG37(CALL教室)参加者 22名10月7日(火)10:30-12:00同上参加者 10名

なお、オリエンテーションに参加できない学生等に対しては、例年通り個別に対応した。

3. 授業概要

3.1 開講クラス

授業概要は前期後期とも同様で以下の通りである。

<日本語特別コース科目一覧>

	科目名	内 容	コマ
初	日本語初級I	初めて日本語を学習する人が対象。初歩的な文法、語彙等および日	
級	総合	常生活に必要なごく基本的な会話および読み書きの技能の習得を目	4

		指す。 テキスト:『げんき I』会話・文法編 (The Japan Times)	В
I	日本語初級 I 表記·作文	初めて日本語を学習する人が対象。かなと簡単な漢字の読み書き、および簡単な文章の読み書き能力を高める。 テキスト:『げんきⅠ』読み書き編(The Japan Times)	1
初級	日本語初級 II 総合	日本語を 150 時間程度学習した人が対象。初級後半の文法、語彙 および日常生活に役立つ会話および読み書きの技能の習得を目指 す。テキスト:『げんきII』(The Japan Times)	4
П	日本語初級 Ⅱ 漢字	初級後半レベルの漢字 500 字程度の習得を目指す。 テキスト:『BASIC KANJI Vol.2』(凡人社)	1
	日本語中級 I 総合	大学生活(研究室、授業等)に必要な日本語の会話技能および中級レベルの文法・語彙の知識の習得を目指す。テキスト:(前期)『中級へ行こう』(スリーエーネットワーク)(後期)『現代日本語コース中級Ⅰ』(名古屋大学出版会)	2
中	日本語中級 I 会話	成人として日常生活、大学生活に必要な会話技能の習得を目指す。 テキスト:『なめらか日本語会話』(アルク)	1
級 I	日本語中級 I 読解	アカデミックな文章の基礎読解力の習得を目指す。 テキスト:『大学·大学院留学生の日本語1読解編』(アルク)	1
	日本語中級 I 作文	アカデミックな文章 (レポートなど)の作成能力の習得を目指す。テキスト:『大学·大学院留学生の日本語1作文編』(アルク)	1
1	日本語中級 I 漢字	中級前半レベルの漢字 300 字の習得を目指す。 テキスト:『INTERMEDIATE KANJI Vol.1』(凡人社)	1
	科目名	内 容	コマ
	日本語中級 II 総合	中級前半修了者が対象。大学生活(研究室、授業等)に必要なより 高度な日本語の会話技能および中級レベルの文法・語彙の知識の 習得を目指す。 テキスト:『現代日本語コース中級 II』(名古屋大学出版会)	2
	日本語中級 Ⅱ 読解·漢字	より高度なアカデミック文章の読解力の習得を目指す。 テキスト:ハンドアウト	1
中 級 II	日本語中級 II 読解·作文	より高度なアカデミック文章 (レポート、小論文等)作成能力の習得を目指す。 テキスト:『留学生のための論理的な文章の書き方』(スリーエーネットワーク)ほか適宜使用	-1
	日本語中級Ⅱ	文系学生に必要な基礎的な語彙・文系の知識の習得を目指す。	1

-	文系日本語	テキスト;ハンドアウト	
	上級日本語	大学生活や研究に必要な高度な口頭表現力の習得を目指す。	
	口頭表現	テキスト: ハンドアウト	1
	上級日本語	大学生活に必要な高度な読解力の習得を目指す。	
	読 解	テキスト: ハンドアウト	1
上		大学の研究に必要な高度な文章作成能力の習得を目指す。	
級	上級日本語	テキスト: 湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、湯、	-0
-	論文作成	(前期)『大学・大学院留学生の日本語4論文作成編』(アルク)	1
		(後期)『大学生と留学生のための論文ワークブック』(くろしお出版)	
21	上級日本語	大学の文系の研究に必要な高度な語彙や表現力の習得を目指す。	
MT.	文系	テキスト: ハンドアウト	1
	上級日本語	大学の理系の研究に必要な高度な語彙や表現力の習得を目指す。	
	理系	テキスト: ハンドアウト	1
		合計単位数	26

4. 実施状況

<前期> (4月10日~8月4日)

科目名	時間	担当	受講者数			
71 11 11	M.1 1H1	1E =	特別	国際	共 通	
初級日本語I総合	水金 1-4	坂本淳子・大高久枝	4	0	-	
初級日本語Ⅰ表記・作文	火 5・6	松林和美	2	0		
初級日本語Ⅱ総合	月木 1-4	大高久枝・大畑佳代子	1	1	-	
初級日本語Ⅱ漢字	月 5・6	松林和美	1	1		
中級日本語 I 総合	月木 1・2	松岡洋子	3	2		

			受講	者合計	137
合 計	26 コマ	26 コマ	49	49	39
上級日本語 D 論文作成	金 3.4	菊地 悟 (教育学部)	4	-	4
上級日本語C理系	金 1・2	照井啓介	1	-	6
上級日本語C文系	木 5 · 6	中村ちどり	2	11 -	2
上級日本語B読解	水 9・10	岡崎正道	2	-	13
上級日本語A口頭表現	月 7・8	松岡洋子	2	-	12
中級日本語Ⅱ文系日本語	月 3・4	岡崎正道	2	6	-
中級日本語 II 読解·作文	木 5 · 6	中村ちどり	0	5	-
中級日本語 II 読解・漢字	水 7・8	岡崎正道	2	8	
	水 3 · 4	松岡洋子	4	4	1
中級日本語 Ⅱ 総合	月 5・6	尾中夏美			
中級日本語Ⅰ漢字	月 3 · 4	尾中夏美	3	1	-
中級日本語I読解	水 7・8	小野寺淑	3	0	
中級日本語I作文	火 5・6	中村ちどり	3	0	
中級日本語 I 会話	水 5・6	尾中夏美	3	3	-

<後期> (10月12日~2月21日)

科目	時間	担当	受講数		
т н	LAI UM	1E =	特別	国際	共通
日本語初級I総合	水金 1-4	坂本淳子・大高久枝	4	0	
日本語初級 I 表記·作文	火 5・6	松林和美	2	0	
日本語初級Ⅱ総合	月木 1-4	大高久枝・大畑佳代子	8	0	
日本語初級Ⅱ漢字	月 5・6	松林和美	2	0	
日本語中級I総合	月木 1・2	松岡洋子	6	6	
日本語中級I作文	火 5 · 6	中村ちどり	5	6	
日本語中級I読解	水 7・8	橋本学(人文社会科学部)	3	6	
日本語中級Ⅰ漢字	月3・4	尾中夏美	4	6	
日本語中級I会話	木 3・4	尾中夏美	7	6	

日本語中級Ⅱ総合	月 5 · 6	尾中夏美		- In sign	* E
1 平 品 中 极 11 秘 日	水 3・4	松岡洋子	2	2	-
日本語中級Ⅱ読解・漢字	金 7・8	岡崎正道	8	2	-
日本語中級 II 文系日本語	月 3・4	岡崎正道	12	1	0
上級日本語 E 口頭表現	月 7 · 8	松岡洋子	2	r.11 s.	8
上級日本語 F 読解	水 9・10	岡崎正道	5	-	9
上級日本語G文系	木 5・6	小浦啓子他 (教育学部)	0	M Z -	2
上級日本語 G 理系	金 1 · 2	照井啓介	0		6
上級日本語 H 論文作成	金 3.4	小浦啓子 (教育学部)	4	-	4
計	26 コマ		74	35	29
н	2021		受講	者合計	138

受講数合計は延人数

5. 問題点·課題

5.1 施設設備

昨年度に引き続きオンライン教材 (アルクネットアカデミー)を利用した。しかし、家族の受講者の場合、情報処理センターでの利用登録が不可能で当該教材は利用できないため、国際交流センター所有のユーザーアカウントでの利用となった。また、教室の空調等の環境改善は引き続き課題である。

5.2 履修者の来学時期とその対応

今年度は初級レベルの履修者が少なく、特に前期では週1回のみの履修者と週2回の履修者が混在し変則的に受講者を入れた。学生の来日時期が定まらず、講座開始時期に間に合わないケースが毎年見られるが、学生の能力、状況に応じて対応するためには、個別指導を充実させることが望ましい。また、協定大学からの履修生が増加しつつあり、中級後半レベルの授業数が不足している。来年度は授業数を増やして対応したい。

以上

(文責:松岡洋子)

日本語研修コース実施概要

1. コースの目的

日本語研修コースは、大学院入学前の日本語予備教育プログラムであり、6ヶ月間の日本語集 中コースとして開講されている。受講対象となる学生は、岩手大学と近隣の大学の大学院へ進学 する予定の留学生(大使館推薦の国費研究留学生および教員研修留学生)であるが、国際交流 センター長の許可を得た場合は岩手大学の留学生とその家族、岩手県立大学留学生とその家族 も受講することができる。毎年4月と10月に開講され、日常生活と研究に必要な日本語の基礎を 学ぶ。

2. 平成 20 年度前期

(1) 受講生

受講生は2名で、岩手県立大学研究生1名、岩手大学研究生の家族1名である。国籍は中国 2名(男女各1名)である。

(2) 授業日程

4月初旬 プレースメントテストと面接

4月21日(月) 授業開始

4月28日~5月6日

連休

7月末

期末テスト

8月初旬~下旬

夏休み

8月下旬~9月中旬

補習授業

9月中旬

授業終了

(3) 週間時間割

e-e-ratificación	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (9:00~10:30)	総合日本語	総合日本語	読解·作文	総合日本語	総合日本語
II (10:30~12:00)	総合日本語	総合日本語	読解•作文	総合日本語	総合日本語
III(13:00~14:30)	漢字	漢字		漢字	漢字
IV(14:45~16:15)			個別指導		

[※] 漢字クラスは 13:45~14:00 の間は自習時間

[※] 日本語授業のレベルは、全て初級 II

(4) 授業担当者

総合日本語: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

読解・作文: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

漢字: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

個別指導: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

3. 平成 20 年度後期

(1) 受講生

受講生は8名で、岩手大学研究生(農学部・教育学部)4名、岩手県立大学研究生1名、日本語研修生(研修後の配属は秋田大学2名、岩手大学1名)である。

中国(男2名、女1名)

タイ(女1名)

中国ウィグル自治区(男1名、女1名)

ブラジル(女1名)

パキスタン(女1名)

(2) 授業日程

10月初旬 プレイスメントテスト・面接

10月7日(火) 留学生のためのオリエンテーション

10月10日(月) 授業開始

12月23日~1月7日 冬休み

1月上旬 スキー研修旅行

2月下旬~3月中旬 補習授業

3月中旬 留学生送別会

(3) 週間時間割

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
I (9:00~10:30)	総合日本語	総合日本語	読解•作文	総合日本語	総合日本語
II (10:30~12:00)	総合日本語	総合日本語	読解•作文	総合日本語	総合日本語
III(13:00~14:30)	漢字	漢字		漢字	漢字
IV(14:45~16:15)		日本事情	個別指導		

※ 漢字クラスは 13:45~14:00 の間は自習時間

※ 日本語授業のレベルは、全て初級 I

(4) 授業担当者

総合日本語: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

読解・作文: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

漢字: 松林和美、坂本淳子、小野寺淑(国際交流センター非常勤講師)

個別指導: 中村ちどり(国際交流センター専任教員)

全学共通教育科目

1. 日本語

主に新入学の1年生が履修する外国語科目としての日本語であるが、彼らは入学の時点で既にかなり高いレベルの日本語能力を有しているので、その実態に合わせて「上級日本語」を5科目用意している。

(1) 口頭表現 (2) 読解 (3) 文系日本語 (4) 理系日本語 (5) 論文作成 以上の5つである。

週に5回の授業を複数の教員が分担しているが、受講者は単位取得希望の学部留学生のほか、単位は不要だが高度な日本語力の習得を望む学生やその家族等も参加し、「日本語特別コース」の上級編をも兼ねるものとなっている。

- (1) ロ頭表現は、ハイレベルな話題をもとに議論をしたり、自分の意見を発表しかつ質 疑応答も行なったりする、高度な会話の訓練。
- (2) 読解は、日本の文化・歴史・政治、現代社会の諸問題などに関する、これもレベル の高い文章 (新聞記事など) の読解の訓練。
- (3) 文系日本語は、文科系の専門分野を学ぶために必要な語彙や文章表現を理解できるようになるための訓練。
- (4) 理系日本語は、理科系の専門分野を学ぶために必要な語彙や文章表現を理解できるようになるための訓練。
- (5) 論文作成は、研究した内容や報告する事項などを日本語でまとめ、記述することができる力を養う訓練。

この授業の受講者は原則として過去に600時間程度の日本語学習歴を有する者に限られているので、相当にハイレベルな内容にもついてこられるはずであるが、それでも中国など漢字圏の出身者とそれ以外の者、専攻分野の違いなどにも起因する関心の度合いの高低などにより、おのずと差が生じてくることは避けがたい。

授業担当者は次の通り

口頭表現:松岡洋子

読解:岡崎正道

文系日本語:中村ちどり・小浦啓子ほか

理系日本語:照井啓介

論文作成: 菊地悟·小浦啓子

(文責:岡崎正道)

2. 日本事情文系

この授業では、外国人留学生が日本で学びまた日常生活を営む上で役にたつ、日本に関する諸事情、諸文化事象等について講義する。具体的な項目は以下の通り。

- (1) 日本語の言語表現の特性
- (2) 日本人の精神と日本文化の特質
- (3) 日本の歴史、歴史上の人物、日本の思想
- (4) 政治・経済・地理・風俗・現代社会の諸問題等、現代日本の諸問題
- (5) その他、日本と日本人に関するあらゆる事柄、また日本と世界の関係など これらの中から、そのつど具体的なテーマを設定して講義するのだが、当然ながら出席 している学生の日本語能力や問題関心等により、内容をいろいろ考え工夫している。

また学生の出身国についても、考慮を払う必要があるであろう。特に政治的に対立する 国の学生が同じ授業に出ているような場合は、どちらか一方に味方するような(あるいは こちらにそのつもりがなくても、そう受け取られかねないような)発言は、極力慎む配慮 が求められよう。

(担当:岡崎正道)

国際交流科目実施報告

1. 概要

国際交流科目は短期留学特別プログラムの交換留学生を主な受講対象として施されるが、日本人学生も専門科目の自由科目単位として認められる。授業は、英語による専門レベルの授業と初・中級レベルの日本語授業が開講された。主な受講生は交換留学生(ノースセントラルカレッジ・アメリカ・テキサス大学、フランス・ボルドー大学、韓国・明知大学、中国・清華大学、寧波大学、吉林農業大学)である。

2. 実施状況

平成20年度の開講状況は以下のとおりである。

<前期;4月10日~8月4日> (国際交流科目として登録者のあった科目のみ記載)

曜日	タイトル	Title	単位	担当教員	受講
火 03-04	ブリンギング・イット・オール・ パック・ホーム - 1960年代 アメリカの文化革命	Bringing it All Back Home: The Cultural Revolution in 1960's	2	Alan Farr	2
************************************		Another Country: The USA in the 1930's and the Birth of Modernity	2	Alan Farr	2
水 09-10	戦後日本経済におけるジェンダーの諸相	Gender perspectives on the postwar Japanese economy	2	藤原千沙	1
月·木 01-04	初級日本語Ⅱ総合	Elementary Japanese II General	4	大高久枝 大畑佳代子	10
月 05-06	初級日本語Ⅱ漢字	Elementary Japanese II Kanji	1	松林和美	1
月·木 中級日本語 I 総合 01-02		Intermediate Japanese I eneral	2	松岡洋子	3
水 05-06 中級日本語 I 会話		Intermediate Japanese I Conversation	1	尾中夏美	3

曜日	タイトル	Title	単位	担当教員	受講
水 07-08	中級日本語Ⅰ読解	Intermediate Japanese I Reading	1	小野寺淑	3
月 03-04	中級日本語Ⅰ漢字	Intermediate Japanese I Kanji	1	尾中夏美	1
火 05-06	中級日本語I作文	Intermediate Japanese I	1	中村ちどり	3
月 05-06 水 03-04	中級日本語Ⅱ総合	Intermediate Japanese II General	2	尾中夏美松岡洋子	4
金 05-06 中級日本語Ⅱ読解・作文		Intermediate Japanese II Reading & Composition	1	岡崎正道	4
月 03-04	文系日本語	JSP for social science	1	岡崎正道	3
集中	個別研究	Independent Studies	2	尾中夏美松岡洋子	4

<後期;10月9日~2月18日>

曜日	タイトル	Title	単位	担当教員	受講
火 09-10	映画に見る日本の文化と社会	Japanese Culture and Society Through Film	2	Alan Farr	2
火 07-08	アメリカはなぜ嫌われる のか	Why US became unpopular country ?	2	Alan Farr	2
金 01-04	スクールインターンシップ	School internship	2	山崎友子 James Hall	1
日本文化と日本人心理の 月 05-06 発見		Discovering Japanese Culture	2	斎藤博次	6
水 07-08	文化の諸相	Cultural Domains	2	M. Unher	3
火 05-06 心理学入門		Introduction to Psychology	2	阿久津洋巳	1

曜日	タイトル	Title	単位	担当教員	受講
月·木 01-02	中級日本語Ⅰ総合	Intermediate Japanese I General	2	松岡洋子	14
木 03-04	中級日本語Ⅰ会話	Intermediate Japanese I Conversation	1	尾中夏美	14
水 07-08	中級日本語Ⅰ読解	Intermediate Japanese I Reading	1	橋本 学	6
月 03-04	中級日本語Ⅰ漢字	Intermediate Japanese I Kanji	1	尾中夏美	6
火 05-06	中級日本語Ⅰ作文	Intermediate Japanese I Composition	1	中村ちどり	6
金 05-06	中級日本語Ⅱ読解・漢字	Intermediate Japanese II Reading & Kanji	1	岡崎正道	2
月 03-04	文系日本語	JSP for social science	1	岡崎正道	6
集中 国際合宿研修		Multicultural Study camp	2	尾中夏美松岡洋子	9

3. 課題と今後の展望

今年度は交換留学生に加え、日本人学生の受講も若干ではあるが、増加した。しかしながら、国際交流科目の担当教員は授業数の負担が大きく、新たに担当教員を発掘することが困難である。今年度末には担当教員の退職等によりさら開講授業数が減少する。現行の運営方法では国際交流科目の維持そのものが困難であり、早期に全学的な運営組織の立ち上げを要望したい。

また、今年度の新たな試みとして、「国際合宿」を開講した。この科目は、岩手大学の海外協定大学等(タイ・サイアム大学、中国・寧波大学・曲阜師範大学、韓国・明知大学・群山大学)から14名、岩手大学9名、盛岡大学3名の計26名が受講し、合宿形式でコミュニケーション能力、問題解決能力の向上を図った。この形態の授業は次年度以降も開講を続けることが望ましいという意見が学生から寄せられた。運営費等で大学の負担が大きいことから継続性については検討しなければならないが、いわて5大学の枠組み等を活用し、恒常的に開講されることが望まれる。

さらに、来年度は「岩手学」の開講も予定されているが、北東北 3 大学、いわて5大学、

海外協定大学等のネットワークを活用し、多様な形式の国際交流科目が開講されるように引き続き検討を行う。
以上
(文責:松岡洋子)

-30 -

夏期休暇および個別日本語補講報告

1. 概要

夏期休暇日本語補講は学期中の通常クラスに参加できない学生や、通常クラスで学習したことを復習したい学生を対象として開講し、アーラム大学SICEプログラム学生の前半日本語教育としても活用した。また、学習者の個別ニーズに対応するため、担当教員およびボランティア学生による補講を実施した。各クラスの内容は以下のとおりである。

①夏期休暇日本語補講

期間: 2008年8月28日~9月25日 9:00-12:00 (全8回16コマ)

対象: 初級修了者、アーラム大学 SICE プログラム(全 10 名受講)

担当: 松岡洋子・尾中夏美

内容・スケジュール:

	日 付	担 当	学習項目			
		ALCOHOL:	①自己紹介			
		, dist	②中学校生活入門			
1	8月28日(木)	尾中	・ あいさつ(立ち居振る舞い)			
		113	・ 先生との仕事の話し			
	MATERIAL PROPERTY.		生徒とのつきあい			
	Armon	THURSDAY.	① 日常生活入門			
2	9月1日(月)	尾中	ホームステイ先の生活			
	d . do donum	5 to 5 10	・ 学校(教師、生徒との私的なつきあい)			
	19211/1273	1.1.3.40	(岩大留学生と合同授業)			
3	9月4日(木)	松 岡	日本語プレゼンテーションスキルトレーニング1			
			―「自分の文化を紹介する」テーマの選択と紹介方法―			
4	9月8日(月)	Les tra	日本語プレゼンテーションスキルトレーニング2			
		月8日(月) 松 岡	―テーマの決定と紹介方法の決定―			
_	9月11日(木)		日本語プレゼンテーションスキルトレーニング3			
5		111日(木) 松 岡	一発表内容の整理一			
6	9月 18 日(木)	I made	日本語プレゼンテーションスキルトレーニング4			
		18日(木) 小野寺	―発表内容の作成―			
7	9月 22 日(月)	0 8 99 8 (8)	0.8.22.07.83	0 8 00 8 (8)	+/ [7]	日本語プレゼンテーションスキルトレーニング5
		松 岡	一発表練習—			
8	9月25日(木)	松岡·尾中	発表会			

②個別補講

日本語能力試験対策

期間:2008年10月17日~12月7日(毎週金曜日10:30-12:00)

対象:学部学生6名

担当:松岡洋子

内容:日本語能力試験1級対策問題集に取り組み、受験準備を行った。

利用教材:日本語能力試験1級対策問題集各種

2. 成果と課題

夏期休暇補講は SICE プログラム学生の準備コース的役割を兼ねて開講したが、昨年度に引き続き、「日本語プレゼンテーショントレーニング」とし、学習者のレベルを問わずプロジェクト方式の技能向上を目的とした。発表までは日本人学生のサポーターが助言を行い、各自スライドを使ったプレゼンテーションを行うことができた。

また、個別補講では、日本語能力試験対策講座を後期の前半に実施し、学生たちの評判も高かった。なお、この講座を受講した日本語能力試験受験者は全員合格した。

課題としては、以下の点が挙げられる。

- 1) 通常の授業で提供できない技能、知識をテーマとした補講の提供
 - ・アジア人材基金の枠組みでビジネス日本語講座が不定期に行われたが、受講できない 学生も多かった。これを補う意味で、来年度はビジネス日本語試験対策を実施する。
- 2) 個別学習支援サポーターの募集システムの確立と人材育成
 - ・昨年度同様、人材育成に時間が取れなかったため、次年度に向けて課題が残った。教育 学部生涯教育課程の学生を中心に、日本語サポートを体系的に行える学生人材を発掘 し育成していきたい。

以上

(文責:松岡洋子)

日本語・日本文化研修コース

1. コースの特色

本コースは日本語と日本の諸事情、すなわち日本の文化・歴史・地理・政治・経済・社会・教育等々について、理解を深めさせることを目的とする。

そして教室における座学にとどまらず、様々な行事や体験学習等が豊富に用意され、 大学外の市民らとも交流しつつ楽しみながら学べるのが本コースの特色となっている。

2. 指導体制

留学生の専門分野や興味・関心に最も合う専攻の教員が、指導教官を務める。

3. 活動内容

周辺の名所・旧跡等を訪ねたり、学内外のイベント等に積極的に参加させて、関係者や市民と交流を深める。花見・バスツアー・キャンプ・盆踊り・七夕・クリスマス・餅つき・スキーツアー・ひな祭り・着物着付け体験・生け花・茶の湯など、季節ごとの催しが、学外の諸団体等の協力も得て数多く企画され、留学生たちはこれらへの参加を通して日本文化を実体験することができる。

4. 受講資格と修了要件

このコースを受講することができる学生は、中級レベル以上の日本語能力を有し、日本語・日本文化に関する分野を専攻もしくは学習している者である。コースの修了者には修了証を交付、また受講科目については、成績等の条件を満たした場合に単位を与える。

(文責:岡崎正道)

日本語・日本文化研修生および短期留学生 修了研究(個別研究)報告

1. 概要

平成 20 年度は前期に4名の学生が個別研究に取り組み、自分の選んだテーマについて資料収集、実験、アンケート等を実施し、さまざまな教員からの助言を受けながら研究をまとめた。

2. 研究内容

当該年度の研修生、個別研究課題は以下のとおりである。

氏 名	出身	身分	研究課題	指導教員
董 媛	中国清華大学	日本語·日本文化 研修生	日本の社会変遷から見た 人称代名詞	菊地 悟 松岡洋子
フィリップ	アメリカ テキサス大学	特別聴講学生 (短期プログラム)	携帯電話文化の 日米比較	尾中夏美
ベンジャマン ギルベール	フランス ボルドー第 3 大学	特別聴講学生 (短期プログラム)	フランス語を勉強する 日本人の動機	中里まき子 松岡洋子
蔡ショウ翼	中国寧波大学	特別聴講学生 (交換留学)	魚に関する日中比較	松岡洋子

国際交流センター担当教員が修了発表までのスケジュールを提示し、指導教員の助言のもとに個別研究を進め、国際交流センター教員が文章の構成および修了発表用資料作成の指導を行った。修了発表会では教員、学生との質疑応答や議論が活発に行われた。なお、発表はビデオ録画し、また、論文にまとめて提出させた。

3. 課題

平成 19 年度以降は国際交流科目「個別研究」として単位化され、短期留学生に履修を奨励した結果、履修者が増加した。この研究は、学生が岩手大学での半年または 1 年間学習したことの総括的な位置づけにあり、今後も積極的に履修を奨励していきたい。

以上

(文責:松岡洋子)

平成 20 年度外国人向け図書館説明会実施報告

1. 目的等

国際交流センターでは、岩手大学に入学した外国人留学生のための図書館説明会(ライブラリー・ツアー)を毎学期行っている。専門の研究や日本語学習を助けるための施設を紹介することにより、留学生が円滑な研究・学習生活を送ることをねらいとしている。中央図書館では毎年4月に各学部の新入生向けライブラリー・ツアーを行っているが、国際交流センターの説明会ではこの内容に加え、日本語が不十分な留学生に対し、容易な日本語・英語・中国語で施設の説明を行う。また留学生用の図書・VCR について詳しい説明を与え、文献検索や図書の貸し出し、VCR の視聴等までを実際に体験する。さらに、留学生のみならず岩手大学図書館を利用したい地域在住外国人にも説明を行っている。

2. 期日·場所·参加者

岩手大学中央図書館

前期:平成20年4月9日(水)13:00~14:00

参加者約20名

後期:平成 20 年 10 月7日(火) 13:00~14:00

参加者約 30 名

3. 担当者

日本語:中村ちどり

英語:尾中夏美

中国語:崔華月/早川智津子

4. 実施内容

- (1) 図書館1階ロビー・レファレンス等の説明
- (2) 図書の貸し出し・返却・自動貸出機の使用法
- (3) ビデオ・テープの貸し出しと館内での視聴法
- (4) 積層書庫・電動書庫の説明と電動書架の動かし方
- (5) OPAC による図書の検索(日本語と英語の操作)
- (6) 留学生用の国際交流図書の説明と日本語レベルの見方
- (7) マルチメディア情報閲覧室、ビジネスコーナー、グループ学習室、新聞・雑誌コーナー等の施設の説明
- (8) 図書館でのマナー、投書の方法について

地域日本語教育支援事業報告

1. 事業の趣旨

本事業は、岩手大学国際交流センターの中期計画および年度計画に基づき実施する地域貢献事業の一環である。平成20年度は学内の地域連携推進事業経費、および中島国際交流財団助成金等を活用し、外国出身の子どもや移民的背景を持つ子どもたちの日本語及び教科学習支援に関わる事業および東北地域の日本語学習支援関係者の情報交流を目的とし日本語学習支援ネットワーク会議を実施した。

2. 事業内容

- 2.1 子どもの学習支援事業
- ①いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会総会

<内容>

日 時:2008年7月2日(木)13:00-14:30

場 所:岩手大学事務局第一会議室

参加者:二戸市教育委員会 学校教育課長 千葉隆

盛岡市教育委員会 学校教育課長補佐 大林裕明

(財)岩手県国際交流協会 事務局長 下河原正夫

いわて多文化子どもの教室むつみっこくらぶ代表 村井好子

ゆうの会代表 熱海アイ子

岩手大学教育学部准教授 新妻二男(議長)

岩手大学国際交流センター長 大野眞男

岩手大学国際交流センター准教授 松岡洋子

岩手大学国際課 上杉明

- 内容: ②平成19年度いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会関連事業報告として、学習支援ハンドブック作成、合宿研修、教材整備、ホームページ作成事業などの実施について報告された。
 - ◎平成20年度の合宿研修、就学支援ハンドブック作成、学習支援ハンドブック研修会等事業計画が承認された。また、協議会として各事業を後援することが了承された。
 - ◎意見交換で、以下のとおり検討された。
 - ・人材バンクの立ち上げを19年度に実施する予定だったが、平成 20年度実施に変更となった。各地域での人材登録に協力をお 願いしたい。
 - ・協議会参加機関のそれぞれの財政が厳しい状況だが、必要な事業は協力して実施できるよう協力をお願いしたい。
 - ・外国出身の子どもが学校教育に参加する際に、情報がまだ不十

分な点が多く、ホームページや協議会総会等を通じて今後とも参加機関同士の連携を図っていくべきだ。

②夏休み多文化子どもの学習会(中島国際交流財団助成事業)

日時:2008年8月7日(木)10:00-15:00

場所:一関市総合防災センター研修室

内容:学生たちが子どもたちの居住地域に出向き、夏休みの宿題や日本語 学習のサポートを1日行った。

参加者:子ども 6名(中国1、ブラジル4、フィリピン1)

留学生 6名(マレーシア3、中国2、韓国1)

日本人学生 8名 保護者 1名 外部講師 2名 引率 1名

計 24 名

③多文化子どもの合宿研修 08(中島国際交流財団助成事業)

a. 県北地区

日時:2008年11月29日(土)~30日(日)

場所:岩手県北青少年の家

内容:合宿形式の研修会で、初日は昼食後から個別学習、百ます計算、夜 はスケート研修、2日目は個別学習を行った。

参加者:子ども 13名(中国)

留学生 4名(中国) 日本人学生 6名

保護者 1名 外部講師 2名 引率 2名 計 28名

b. 中央・県南地区

日時:2009年1月11日(日)~12日(月)

場所:岩手山青少年交流の家

内容:二戸地区と同様、合宿形式の研修。初日は午後から個別学習、百ま す計算、夜は交流会、2日目は個別学習、折り紙などを行った。

参加者:子ども 12名(中国6、モンゴル3、ロシア1、ブラジル1、フィリピン1) 留学生 6名(モンゴル1、ロシア1、中国4) 日本人学生 3名 保護者 4名 外部講師 2名 引率 2名 <u>計 29名</u>

④学習支援ハンドブック研修会 ((財)岩手県国際交流協会共催事業)

日時:2008年8月1日(金)-2日(土)

場所:岩手県国際交流センター(アイーナ)研修室

内容:2007 年度に作成した『多文化子どもの学習支援ハンドブック』の使い方について概説するとともに、現場で活動する参加者同士で検討し、改訂作業を行った。

⑤就学支援ハンドブック作成((財)岩手県国際交流協会主催事業)

期間:2008年10月-2009年3月

内容:外国から岩手に転入し、子どもが岩手の学校に就学する際に必要となる情報を日、英、中、韓、ポルトガル、フィリピノの各言語でハンドブックに整理した。

<成果と課題>

昨年度設置された「いわて多文化子どもの学習支援連絡協議会」の事業として、上記の事業を実施した。協議会には資金的基盤がないため、岩手大学、(財)岩手県国際交流協会が各種助成金を活用して事業を展開した。今後、助成金活用による事業の継続は困難が予想される。ハンドブック等の情報、素材については整備が進めば当分、経費は不要であるが、合宿研修等、直接子どもの学習支援を行う活動については、財政的基盤がないと継続が困難である。各関係機関が連携し、財政的課題を解決するべきである。

2.2 日本語学習支援情報交流事業

◎日本語学習支援ネットワーク会議 08in AKITA

日時:2008年12月13日(土) 10:00-16:30

場所:秋田大学教育文化学部

参加者:80名

内容:【午前】パネルディスカッション「定住外国人と日本語学習支援」 【午後】分科会(1)子どもの学習支援一日本語学習と教科学習

(2)行政、大学の役割

(3)日本語教室の運営

全体統括

<成果と課題>

平成 17 年度より始まった「日本語学習支援ネットワーク会議」は、岩手大、東北大、山形大、秋田大と東北の国立大学のネットワークを活用し、地域の日本語学習支援に関する関係者、関係機関の情報交流が行われてきた。大学が本事業を主催することにより、行政、民間をつなぐ役割を果たすことができたことが成果である。来年度は福島大学を会場に開催が予定されているが、継続するための財政的基盤が必要である。

(文責:松岡洋子)

平成 20 年度岩手大学 UURR プロジェクト報告

1. UURR プロジェクトチーム

大野 眞男 プロジェクトリーダー 副学長・国際交流センター長

堀江 皓 顧問 工学部客員教授

藪 敏裕 教育学部教授

新妻 二男 教育学部准教授

平原 英俊 工学部准教授

壽松木 章 農学部教授

小野寺 純治 地域連携推進センター教授

対馬 正秋 地域連携推進センター教授・技術移転マネージャー

早川 智津子 国際交流センター准教授

鈴木 一寿 研究交流部研究協力課副課長

上杉 明 研究交流部国際課副課長

崔 華月 研究交流部国際課外国語専門職員

石沢 友紀 研究交流部国際課主任

2. UURR プロジェクトの趣旨

成長著しい中国においては、産学連携が経済発展の一翼を担っている。他方、日本の産業界は市場の将来性を展望し、改めて中国への技術・資本の進出を開始しようとしている。

本学では、学長特命プロジェクトとして、平成15年度より、これまでの学術交流及び地域連携の成果を踏まえ、国際的な大学間ネットワークを活用した地域企業の国境を越えたビジネス・チャンスの場を造り出し、地域経済の発展に寄与するための事業(University and University+Region and Region=大学・大学と地域・地域の連携事業: UURR プロジェクト)を推進してきたところである。

3. 平成 20 年度における UURR 事業

3.1 大連理工大学との UURR 事業

(1) ジェトロ RIT 事業採択までの経緯

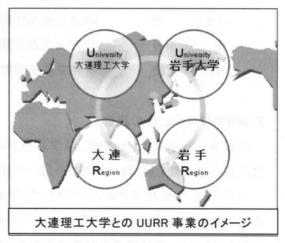
岩手大学は、大連理工大学との学術交流協定(平成 17 年 5 月 23 日締結)に基づき、平成 18 年 4 月に大連理工大学内に両大学共同出資の「大連理工大学・岩手大学国際連携・技術移転センター」(以下、「センター」と呼ぶ。)を開設した。

また、本事業推進のため、岩手大学内において、「岩手大学・大連理工大学国際連携・技術移転室」(以下、「技術移転室」と呼ぶ。)を設置し、センターの運営及び事業に係る事項について両大学で協議のうえ、国際的な産学連携、学術交流、学生交流等の連携事業を推進している。

このような本学と大連理工大学との UURR 事業の取組みが評価され、平成 19 年 2 月に、日本貿易振興機構(ジェトロ)の Local to Local 産業交流事業(事前調査案件)(以下、「LL事業」と呼ぶ。)に採択された。これを受け、同年3月には、本学関係者及び岩手 UURR ものづくり産業連携推進協議会(注)の企業関係者からなる訪問団を中国遼寧省大連市に派遣し、大連理工大学において開催された「大連理工大学・岩手大学国際科学技術協力交流会」に出席するなど、研究者交流及び両地域の企業間交流を行った。

以上のような平成 18 年度に行った LL 事業のもとでの活動および大連理工大学との UURR の取組みが評価され、平成 19 年度に、従来の LL 事業を発展させたジェトロの新たな「地域間交流支援 (Regional Industry Tie-Up Program: RIT) 事業」(以下、RIT 事業)に、「岩手地域ー中国大連地域(ものづくり基盤技術)」案件(岩手大学と大連理工大学のコーディネートのもと県内企業の国境を超えたビジネス・チャンス創造を推進するプロジェクト。以下、「岩手 UURR プロジェクト」と呼ぶ。)が採択され、大連へのミッション派遣及び「第1回大連理工大学・岩手大学国際科学技術・産業交流会(RIT 事業・UURR プロジェクト)」の開催、大連地域の有力企業の岩手招聘、本学研究者等による大連出張調査などを実施した。

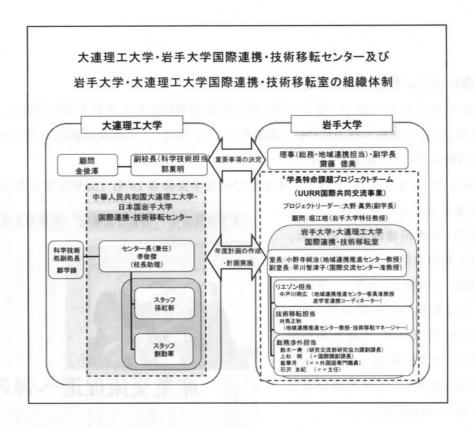
さらに、平成20年度も19年度に引き続きRIT事業に採択された。本件採択により、本学と大連理工大学とのUURR事業はジェトロの支援も得て、より一層の展開が図られてきている。とくに、20年度においては、大連と岩手との持続的な連携関係を構築するため、企業間連携に大学や地方政府を巻き込んだ取組を実施することができた。特に、日本の大学と中国企業との連携に加え、中国の大学と日本の企業との連携も視野に入ってきたことは画期的なことであったと考える。



なお、RIT事業については、ジェトロより今年度の活動が評価され、平成21年度も金型技術について継続されることが決定した。

(注) 岩手 UURR ものづくり産業連携推進協議会: 岩手 UURR プロジェクトを推進することを目的に、岩手大学のほか、現在、県内企業等14社、岩手県、岩手県工業技術センターが参加している。本学の大野真男副学長が会長を務め、技術移転室が事務局を担当している。

以下、平成 20 年度における大連理工大学との UURR 事業について述べる。なお、文中の<RIT 事業>は、ジェトロ RIT 事業の支援を受けた UURR 事業を示している。



(2) 岩手大学の技術成果の中国企業への移転

- ① 2008 年 11 月 11 日、堀江客員教授の鋳造技術「片状黒鉛鋳鉄の高強度化に関する技術」について、岩手大学・大連理工大学・大連四達鋳造有限公司の3者間でノウハウライセンス及び共同開発契約を締結した。
- ② 2008年11月11日、千葉則茂教授のIT技術「自然現象に関するリアルタイムアニメーション技術」に関連し、岩手大学・大連理工大学・大連泰康科技有限公司の3者間で共同開発に関する秘密保持契約を締結した。

(3) 両大学の研究者交流及び共同研究の推進

- ① 2008 年 4 月 22 日~25 日、大連理工大学化工学院電気化学工程研究室主任の劉貴昌副教授と施志聡副教授が岩手大学工学部を訪問し、熊谷直昭教授、宇井幸一准教授と学術交流及び学生交流等について協議した。
- ② 2008年11月11日、岩手大学の専門家11人(山形大学2名含む)は大連理工大学を訪問し、 大連理工大学ソフトウェア学院、材料学院の専門家と交流を行った。また、ソフトウェア開発における交流事業について双方が合意した。

(4) 両大学共同の日中両国政府への国際科学技術連携プロジェクトの申請

2008 年 10 月 8 日、センターは国際協力プラットフォーム建設のため、大連市外国専門家局に「2009 年度大連市国外智恵導入プロジェクトに関する計画」を提出した(申請額 36 万元)。

(5) 大連ミッション・調査団等の派遣

- ① 2008 年 8 月 4 日~10 日、岩手大学の堀江皓客員教授ほか 2 名が大連を訪問し、大連四達 鋳造有限公司との今後の協力について協議を行った。同時に、大連金河鋳造有限公司とも技術 移転の可能性について協議を行った。
- ② 2008月11月9日~11月14日、本学及び産官学関係者26名(山形大学2名含む)から

なる大連ミッションを派遣した。訪問期間中、大連四達鋳造有限公司、 大連金沢特鋳有限公司、大連金州東 方鋳鋼廠、大連模具(金型)工業園弁 公室、大連泰和冲圧有限公司、共立 精機(大連)有限公司、大連高新技術 産業園区、大連華暢電子通信技術有 限公司等を視察し、大連市政府及び 大連企業との連携を推進した。

(6) 学生交流の実施

2008 年 11 月 11 日、岩手大学工学 部が大連理工大学化工学院との学生 交流に関する覚書を締結した(2009 年 4 月、工学部は大連理工大学からの学 生 2 名を受入れ予定)。



鋳造技術のノウハウライセンス・共同開発契約

(7) 大連理工大学との UURR 交流会の実施

2008 年 11 月 11 日、大連理工大学国際会議センターにて「第 2 回大連理工大学・岩手大学国際科学技術・産業交流会 (RIT 事業・UURR プロジェクト)」を開催した。同交流会において、上記(2)の①・②の 2 契約、上記(6)の学生交流に関する覚書が締結された。

(8) 大連地域の有力企業等の岩手招聘

RIT 事業の一環として、以下の大連地域の有力企業及び専門家を岩手に招聘し、岩手大学及び岩手地域企業等の間で交流を行った。

- ① 2008 年 9 月 23 日~9 月 27 日、大連泰康科技有限公司 戴維社長を招聘し、岩手大学との 共同研究についての具体的な話し合いを行った。
- ② 2008 年 10 月 26 日~10 月 29 日、大連四達鋳造有限公司 劉宏偉社長を招聘し、岩手大学 堀江客員教授との協議、奥州市及び同市の鋳造企業等との交流を行った。
- ③ 2009年2月15日~2月21日、大連模具(金型)協会 徐林秘書長、大連経済技術開発区経済貿易局大連模具工業園弁公室 孫力生副主任を招聘し、岩手大学及び北上市の金型企業等との交流を行った。

(9) UURR・大連ミッション派遣報告会開催

2009年2月17日、岩手大学(図書館生涯学習・多目的学習室)において、「UURR・大連ミッション派遣報告会」を行い、第一部「UURR 報告会」において、大野眞男副学長・プロジェクトリーダーが過去5年間のUURR事業を総括する報告を行った。第二部「大連ミッション報告」において、大連開発区日本事務所王新所長及び上記(8)③で招聘中の大連の金型専門家等による基調講演及び大連ミッション参加者による報告を行った。

(10) 大規模商談会への参加

本学は、センターを活用し、大連理工大学と共同して中国等での展示・商談会に参加している。 センタースタッフ及び本学教職員らが以下の商談会に参加し、岩手大学の技術の展示を行った。

- ① 2008年4月22日~24日、柳州市政府主催で、柳州市博物館で行われた「2008年重点大学科学技術成果紹介商談会」に参加した。柳州市企業のニーズに合った産業化可能な技術成果を紹介した。
- ② 2008 年 5 月 18 日、常州市科教パークで開催された「2008 年中国常州先進製造技術成果展示商談会」に参加し、常州市の 600 近くの企業とマッチング商談を行った。同商談会で、「大連理工大学常州研究院」に関する協定が締結された。同協定に基づき、センターは岩手の技術成果を常州市で紹介し、大連理工大学研究院のプラットフォームを利用して、大連理工大学-岩手-常州の連携を推進していく。
- ③2008 年 6 月 18 日~20 日、大阪(INTEX 大阪)において「2008 日中韓産業交流会(大阪)」が 開催され、岩手大学・大連理工大学・韓国国立ハンバット大学校の3大学共同ブースを設置し3大 学の研究シーズの紹介を行った。
- ④ 2008 年 9 月 5 日、センターは大連世界博覧広場で開催された「2008 年中国国際特許技術と

製品交易会」に参加し、技術成果を宣伝し、企業とのマッチングを図った。

- ⑤ 2008 年 9 月 19 日、同センターは常州市武進区人民政府主催の「2008 年武進科技経済貿易商談会」に参加し、同センターの国際連携プロジェクトの常州市への展開を推進した。
- ⑥ 2008年10月28日、合肥市国際会議展示センターで開催された「2008年中国(合肥)自主創新要素マッチング会」に参加し、センター及び技術成果を紹介した。

(11) その他

2008年9月4日、岩手大学藤井克己学長をはじめとする訪問団が大連理工大学を訪問し、両大学の連携について協議した。

なお、2009年2月18日、岩手県黒沢尻工業高等学校の生徒・教員の大連理工大学機械学院 国家級研修センターの見学に関連し、支援を行った。

4. UURR の将来展望

上述のとおり、平成 20 年度における UURR プロジェクトは中国の大学である大連理工大学との交流を中心に行われた。その間、他大学においても、本プロジェクトに対し関心が示されており、以下紹介する。

4.1 韓国国立ハンバット大学校を交えた日中韓3大学の連携可能性の模索

(1) 日中韓 3 大学等参加の「UURR 国際産学官連携セミナー」の開催

前述のとおり、2008年6月18日~20日大阪(INTEX大阪)において「2008日中韓産業交流会(大阪)」が開催され、岩手大学・大連理工大学・韓国国立ハンバット大学校の3大学共同ブースを設置し3大学の研究シーズの紹介を行った。

これに合わせて、6月21日岩手大学内の盛岡市産学官研究センター(コラボ MIU)において、「UURR 国際産学官連携セミナー」を開催し、岩手大学(発表者:大野副学長)、大連理工大学(李俊傑校長助理)、韓国国立ハンバット大学校(具本及産学協力団長)の日中韓3か国3大学及び、岩手ネットワークシステム(大石好行運営委員長)、韓国大田(テジョン)テクノパーク(李鎮玉院長)、韓国江原道人間生命RIS研究会(国立江原大学校鄭聖勲教授・江原道発展研究員金石中博士)がそれぞれの産学官連携の取組みについて発表した。

なお、2008 年 10 月 10 日、韓国大田広域市において開催された、世界科学技術都市会議 (WTA)の「第 5 回学長フォーラム」(ホスト校:韓国国立ハンバット大学校)に、岩手大学藤井克己学長が出席し、岩手大学の法人化後の取組みについての講演を行った。その際、同フォーラムに参加していた大連理工大学李俊傑校長助理より、2009 年 5 月に大連理工大学において「日中韓3大学国際産学官連携セミナー」を開催したい旨の表明がなされた。

(早川智津子 国際交流センター)

短期留学プログラムによる受け入れ・派遣

1. 受け入れ

米国の協定大学から昨年度 10 月から短期留学プログラムによる学生を 2 名受け入れた。日本語科目と日本事情(多文化共生)以外は英語による開講科目であり、日本人や他の留学生との共修科目である。S.Y.は家庭の事情でプログラム半ばの5月に帰国した。

表 1. 交換学生の国際交流科目履修状況

P. Y.	S. Y.
(滞在期間:2007 年 10 月~	(滞在期間:2007 年 10 月~
2008年9月)	2008年5月)
中級日本語1作文	中級日本語1作文
中級日本語2総合	中級日本語2総合
中級日本語1読解	中級日本語1読解
中級日本語2読解・作文	中級日本語2読解・作文
文系日本語	文系日本語
理系日本語	理系日本語
ブリンギング・イット・オール・	ブリンギング・イット・オール・
バック・ホーム―1960年代	バック・ホーム―1960年代
アメリカの文化革命	アメリカの文化革命
戦後日本経済におけるジェン	戦後日本経済におけるジェン
ダーの諸相	ダーの諸相
多文化コミュニケーション A	多文化コミュニケーション A
個別研究	もう一つの国:1930年代の
	アメリカと現代の誕生
	個別研究
	(滞在期間:2007 年 10 月~2008 年 9 月) 中級日本語 1 作文 中級日本語 2 総合 中級日本語 1 読解 中級日本語 2 読解・作文 文系日本語 理系日本語 ブリンギング・イット・オール・ バック・ホーム—1960年代 アメリカの文化革命 戦後日本経済におけるジェン ダーの諸相 多文化コミュニケーション A

国際交流科目は日本人学生も履修が可能なため、リストに載っている授業はすべて開講していることになっているが、現実問題として開講科目としてリストに載り履修希望が出ていた科目が、教員の異動や開講授業の組織改編などの理由から開講をキャンセルする例が数件あった。また、国際交流科目を運営する基盤となる委員会が未だ立ち上がっていないことが安定した運営に大きな支障となっている。もともと英語で教える国際交流科目は開講数が多くないため選択の余地がほとんどなくなっている状態である。国際交流センターとしての個別対応では対応に限界があるので、教員へのさらなる支援など組

織的な改善がせまられている。

2. 派遣

今年度は国際交流センターで派遣を担当している全学対象の米国、カナダの協定大学へ学生を派遣することができなかった。希望者はいたが英語力にかなり不足があったため、面接で不合格を出さざるを得なかったのが主な原因である。

海外での留学や研修の希望者を増やすために、英語力の底上げプログラム、ウェブ上で体験記を随時公開することによる動機づけの継続、留学体験談を直接聞ける機会の提供、きめ細かな留学相談などを通じて派遣できるように今後も努めていきたい。

(報告:尾中夏美)

米国アーラム大学サイスプログラム関連事業報告

1. 2008 年度サイスプログラム概要

岩手大学では米国インディアナ州にあるアーラム大学と平成15年8月11日に学術協定を締結し、 2005 年度にはさらに学生交流の覚え書きを交わした。本学はアーラム大学が毎年盛岡市に学生を派 遣して実施するサイスプログラム(SICE: Studies in Cross-Cultural Education)に対して以下の支援を 行っている。

- (1) サイス学生に対する日本語教育の提供
- (2) サイスプログラムの引率教員がサイス参加学生に対して授業を行う教室の提供 今年度のプログラムの概要は以下の通りである。

受け入れ期間:2007年8月21日(木)~12月4日(木)

参加人数:9名(学生8名+引率教員の夫)

2. 日本語教育(担当:松岡洋子)

<スケジュール>

来日後のスケジュールは以下のとおりである。なお、日本語教育は原則として毎週月曜と木 曜の午前中2コマの授業を行った。

① オリエンテーション 8月21日

② 日本語教育1期:夏期休暇日本語補講

8月28日-9月25日(計16コマ)

③ 日本語教育 2 期:国際交流科目(前半)

10月9日-12月 4日(計36コマ)

<内容>

① 夏期休暇日本語補講

日本語プレゼンテーションスキルトレーニング(全員)

*詳細は本年報の「夏期休暇日本語補講報告」の項参照のこと。

② 国際交流科目(前半)

【初級後半レベル】初級日本語Ⅱ総合(6名)

【中級前半レベル】中級日本語 I 総合+中級日本語 I 漢字+中級日本語 I 会話(2名)

【中級後半レベル】中級日本語Ⅱ読解+中級日本語Ⅱ読解+多文化コミュニケーション

(1名)

*教材等については本年報の「日本語特別コース実施報告」の項参照のこと。

3. ハローパーティーとイングリッシュ・カフェ

岩手大学生とサイス学生との交流の場を提供する目的で、ハローパーティー(アーラム大学主催)とイングリッシュ・カフェ(岩手大学主催)の2度の交流事業を実施した。内容は表1の通りである。

ハローパーティーは出会いを主たる目的としているので使用言語に制限がない。一方、イングリッシュ・カフェは少人数で英語での会話が楽しめるように設定し、"カフェ"のようにお茶とお菓子を食べながらのリラックスした雰囲気での交流の場となっている。サイス学生は岩大生のために全て英語で会話をすることに取り決めている。

表 1.事業内容

事業名	日 程	参加人数
ハローパーティー	10月9日(木)16:30-18:00	50 名
イングリッシュ・カフェ	11月6日(木)16:30-18:00	30 名

4. 学内留学

サイス学生は引率教員の専門分野の講義をアーラム大学の教育プログラムの一環として英語で受講する。岩大生の英語能力向上に資する為岩手大学とサイスプログラム担当者とで協議して、若干名の日本人岩大生がサイスプログラムの引率教員の講義を聴講できることとなり、岩手大学ではこれを「学内留学」と呼んでいる。今年度の概要は表2の通りである。2か月前となる6月に学内留学の参加者募集を行って、参加者希望者が各自の時間割に組み込みやすいように配慮した。

表 2.学内留学概要

開講日程	平成 19 年 8 月 28 日(木)から 12 月 4 日(木) 毎週木曜日 13:00-16:00
テーマ	環太平洋のアート
受講の形態	聴講生として授業に参加し単位は認めないが、成績評価は受ける。
受講条件	十分な英語力と意欲を有する学部生または院生
選抜方法	希望者を英語面接し若干名を選抜

今回応募し、受講が許可された学生は人文社会科学部の3年生一人だった。学内留学に参加して の満足度が高く、アーラム大学の学生と親しくなれたとの感想を残している。そのほかの感想は以下の 通りである。この体験を通して参加学生がアーラム大学の学生との人間関係を築くとともに、英語力の 総合的な向上が実感できた様子が伺える。

アンケートの質問と受講生の回答

今回の経験があなたの学習に関してどのような影響を与えましたか?できるだけ具体的に書いて下さい。

今回 SICE プログラムの学内留学に参加させていただいて、まず一番に実感することは速い英語が聞き取れるようになったことです。最初のうちは、先生の話はもちろんのことクラスメートの会話でさえも聞き取れないことが多くて、これからどうなることやらと思いましたが、次第に自分でもわかるぐらいリスニング力がアップしたと思います。なので3か月半頑張った甲斐があったなぁと思いました。

日本の授業との違いがあり、形式に合わせていく努力があったと思いますが、どんなところが一番大変でしたか?

一番大変だったことは授業前にひたすら文献を読むことでした。私にとっては一生分の英文 を読んだのではないかと思えるくらい多くて、途中で何度かこの学内留学に申し込んだこと を後悔しましたが、次第に読み方のコツ?みたいなことがわかってきた気がするので、その あとは少し楽に読めるようになってきました。膨大な量の文献を読めたという経験のおかげ で、今なら多少の英文なら抵抗なく読めるようになったと思います。

あなた自身の英語力は受講期間中にどのように変化しましたか?

上にも述べたとおり、リスニング力が向上したと思います。海外ドラマを支障なく英語で見られる くらいまで成長しました。英語のリズムがわかってきたのかなぁと思います。

5. 英語による特別講義

サイスプログラムの受け入れ期間中に一度、引率教員は岩大の学生に対して専門分野に関連した特別講義を実施することになっている。今年度は昨年度に引き続き大学教育センターとの共催事業でESD銀河セミナーとして実施した。日本語に訳されたパワーポイントのスライドを見ながら講師が英語で講演し、国際交流センター教員が日本語に通訳した。外部からの聴衆が来て、活発に質問も出された。

表 3.特別講義概要

開催日時	平成 20 年 10 月 30 日 (木) 16:30-18:00
講演題目	「アボリジニー芸術―文化的多様性のメッセージ」
参加人数	45 名

6. 結果と今後の課題

6.1 広範な交流

大学における通常の学生交流は 1,2 名という極めて少人数の交換学生と彼らと交流できたごくわずかな日本人学生のみに受益者が限定される傾向にある。しかし、この事業では短期ではあるがまとまった人数のアーラム大学の学生が多くの岩大生と交流の機会を持つことにより、本来国際交流に関心の薄かった、または関心は持っていても交流の機会を自ら作る勇気の持てなかったかなり広範囲の日本人学生に働きかけることが可能となった。

6.2 英語を使用する機会の提供

外国語として英語を履修する学生は多いが、実際に使用できる機会があまりないためモティベーションを維持できず、英語学習が構文を暗記し訳読するだけの「死語化」する傾向にある。同年代の米国大学生との交流を持つことで英語を実際に話す機会を提供することは、異文化理解と語学力維持の両面から大変有意義と言えよう。また、海外研修を現実にしている米国大学生に触れることで「留学」を別世界の遠い存在から身近で自ら実施する可能性を持った具体的な存在に変えることができた。

6.3 学内留学の単位付与にかかわる課題

学内留学は授業時間が多く英語で全ての課題をこなしていくので、その学習時間に対して単位を付与して欲しいという要望がこれまで参加学生から出されていた。しかし、単位を本学の科目名に振り替えた場合、米国人学生と同じ授業を英語で受講したという特殊性が目に見える形にならないため、学生の利益になりにくい側面がある。そこで、アメリカの大学から評価を受けたという証拠となる成績証明をアーラム大学側に出してもらい、岩手大学からも国際交流センターから認定書を日本語で出し、就職活動等で活用してもらえるように対応した。

(報告:尾中夏美)

ヤングリーダーズ国際合宿研修 in IWATE

1. プログラム概要

「ヤングリーダーズ国際研修」は、いわて高等教育コンソーシアムに所属する学生たちと、海外学術協定校 など、海外の大学に所属する学生たちが、共同作業やフィールドワークなどを通じてグローバルなコミュニケー ション能力を高め、多文化理解等に関する実践的な教育の場を提供する研修である。2008 年度「ヤングリーダ ーズ国際研修」では、タイ、韓国、中国のアジア3カ国から学生と引率教員を合計17名招へいし、岩手大学、盛 岡大学の学生11名とともに、「食と持続可能な社会」をテーマに、持続可能な社会構築に向けた学生たちの役 割について体験を通じて考えさせた。

2. 実施内容

【期間】

2009年2月19日(木)~2月28日(土)(全10日間)

【スケジュール】

2月18日(水) オープニングレセプション (市内ホテル)

19日(木) オリエンテーション、事前課題発表会

シミュレーション: 世界の食資源と安全性 (国立岩手山青少年交流の家)

- 20日(金) 討論:食の持続可能性を捉える視点 (国立岩手山青少年交流の家) タ方から海外参加者はホームステイ
- 21日(土) 海外参加者はホームステイ
- 22日(日) 夕方参加者合流。

実地体験のためのオリエンテーション(国立岩手山青少年交流の家)

- 23日(月) 食と循環型社会体験 (森と風のがっこう: 葛巻町)
- 24日(火) 同上
- 25 日(水) 同 上

振り返り・討論:食の持続可能性についての課題整理 (国立岩手山青少年交流の家)

- 26日(木) 発表準備:持続可能な食生活のためにできること(国立岩手山青少年交流の家)
- 27日(金) 午前:練習 午後:発表会 クロージングレセプション (岩手大学)
 - 28日(土) エクスカーション

【参加者】

<交流協定大学等>

韓国:群山大学 3名

明知大学 3名

中国:寧波大学3名

曲阜師範大学 2名

タイ:サイアム大学 4名

< 日本人学生>

岩手大学: 8名 盛岡大学 3名

<指導、引率教員>

岩手大学 2名 サイアム大学 1名 寧波大学 1名

【研修内容】

「食と持続可能な社会」

事前課題 :①自分の食事の成り立ちを調べる。

(食事の記録写真(3日間分)、わかる範囲でその食材の産地を見る)

②地元でとれるもので作られた地元の郷土料理を紹介する。

研修中課題:各国の食生活調査報告 食と持続可能性の課題発見 「森と風のがっこう」(葛巻町)における食と生活体験 調査体験に基づく研究討論

最終発表

3. 成. 果

参加学生と引率教員全員を対象に、中国語、韓国語、英語、日本語で質問項目を書いたアンケートを実施し た。タイの学生には、できるだけ正確なデータを得るために回答はタイ語で記入させた。参加学生のアンケー トでは、全員が「意義の大きい研修だった」と回答している。学生が学んだ項目として以下のようなものがあげら れる。

- ◎英語ないし日本語を使った討論を通して、自らの語学力を認識し、単なる語学学習を超えたアカデミッ クコミュニケーション能力を高める機会となり、また、今後の学習への動機付けとなった。
- ◎外国人、あるいは外国に対する偏見がなくなり、人間として多様な背景の学生同士がコミュニケーション できることを実感した。
- ◎体験と討論を重ね、そこから出たアイデアに対してさらに問いかけを繰り返したことにより、自らが課題 を発見し、その解決に向けた方策を構築するおもしろさを学んだ。

さらに、成果発表では、学生たちは岩手大学の学生プロジェクト支援事業である「Let's びぎんプロジェク ト」にて、子どもを対象とした「食と持続可能な社会のためにできること」という教育プログラムを実施するための 企画案を作成した。この企画では、今回の研修参加学生たちが日本、韓国、中国、タイでそれぞれプロジェクト を実施し、それをインターネットでつないで意見交換をすることを通じて、子どもたちに「食」「持続可能性」「国 際社会と自分のつながり」という点を体験的に学ばせるというものである。海外協定大学の引率教員からも、本 研修に対して高い評価を得ており、また、次年度以降、各国での開催を検討したいというコメントも得た。今回 の研修が一過性のイベントではなく、継続性のあるものへ発展することが期待される興味深い成果といえよう。

*本年報の「多言語状況による問題解決型研修の試み」の項参照。

(報告:尾中夏美・松岡洋子)

海外留学支援事業

海外の大学との学生交流や様々な海外研修プログラムについて学生に関心をもってもらう目的で以下の事業を実施した。

1. 海外留学・研修オリエンテーション

実施日程と参加人数は以下の通りである。

実施日程:5月21日(水) 午後4時30分~午後7時50分 参加人数:30名

前日には大学生協主催の TOEIC 体験も催され、この二日間を大学生協との国際教育共催事業と位置づけた。オリエンテーションの内容は、表1の通りである。

表 1. プログラム

時 間	内 容
16:30~16:45	海外留学・研修の意義と岩手大学での支援体制について
16:45~18:25	ロシア交換留学(人文社会科学部)
	韓国交換留学(全学)
	米国語学研修、中国交換留学(農学部)
	カナダ・オーストラリア語学研修(全学)
	国際ボランティアプロジェクト、TOEFLiBT について
	カナダ・米国交換留学(全学)
	オーストラリア語学研修(工学部)
	米国、カナダ交換留学(全学)
19:10~	海外留学・研修体験者による体験談(フランス:ボルドー第3大学交換留
	学、カナダ:セント・メアリーズ大学交換留学)
19:40~19:50	質疑応答、アンケート記入
19:50	終了

2. 留学説明会

全学対象の交換留学申請のための説明会を以下のように実施した。 日程:10月9日(火)

対象となるプログラム: (米国)テキサス大学オースチン校、アーラム大学 (カナダ) セント・メアリーズ大学

申請の締め切りは10月31日とした。今年度4名の申込があった。面接審査の結果、来年秋学期から1名を協定大学に推薦することとした。

3. 個別留学相談

個別留学相談は学生それぞれの授業時間と重なる場合があるので、不定期に実施している。相談受付のポスターは常時掲示しているので、希望者は国際課を通すか直接メールで相談時間の予約を入れてくる。

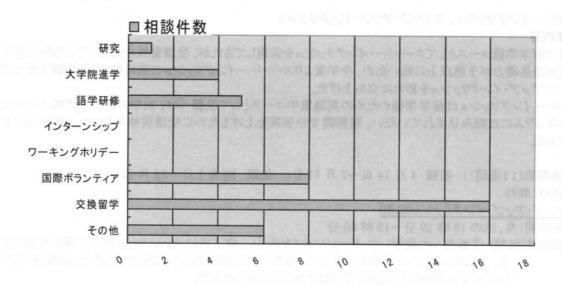
相談内容は語学研修、交換留学と多岐に渡るが、学生側の情報収集不足がかなり見られる。人生設計や将来の希望職種などについても話を聞きながら相談に応じている。また、高い語学力を求められる留学に関しては、準備方法などについても助言している。

表 2. 相談者所属別留学相談のべ件数

月							20	08年月	度					左座入司
		4 5		6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	年度合訂
	1年		1	6	3					1			1	12
	2年	2		2				2		1	2		40	9
人社	3年	1_			111					1				2
	4年	1						2						3
	院								1 1	77				0
	1年				1					Ma.	1		1	3
	2年	1	2						711	2	1			6
教育	3年					- 11	u Ti							0
	4年			1	1 1 8	1	1			1	. 1.59			2
	院						1		A JUNE	11.1	1			1
	1年							9 84 7	Je -					0
	2年							1 100		1111				0
工学部	3年	1		1	10.16			19/21	1	144	77			3
	4年			7.1	141			1	1					2
	院	1								100				1
	1年			1				1				1		3
	2年													0
農学部	3年			1										1
	4年				17	1			N/y					0
	院											1.10	11111	0
合計		7	3	12	4	1	0	6	2	5	5	1	2	48

最外派進のための語学支援

表 3.相談内容別件数



4. 国際ボランティア等参加者支援事業

4.1 主旨

昨年度岩手大学創立50周年記念事業実行委員会奨学金を運用して国際交流事業を行うことになり、 当事業をスタートさせた。この事業では CIEE が募集する国際ボランティアプロジェクトおよび国際エコボランティアプロジェクト参加者5名程度に1人当たり6万円の支援を行うことで、国際的活動に関心を持つきっかけ作りをしようとするものである。

5.2 事業の経過

昨年度中に26名の候補者全員を面接し、5名に奨学金を提供した。奨学金から漏れた学生のうち、10名は自費で参加した。今年本学の国際ボランティア参加者数は全国国立大学で1位になった。参加学生には帰国後アンケート調査を実施したが、回答を寄せた学生全員が他の学生に「ぜひ参加すべきだと勧める」または「参加した方が良い」のいずれかを選択したことからも、体験の充実がうかがえる。

5.3 国際週間での体験発表

奨学金を付与された5名の学生を中心に、さらに参加者の裾野を広げることを目的に学生センター1 階のラウンジにおいてパネル展示を期間中常設し、より多くの学生の目に付くように昼食持込ができる 会場設営をして、体験発表会を実施した。

日程:11月4日(火)~7日(金) 体験発表は12:10~12:40 (各 20 分間)

体験発表: 4日(火) フランス 5日(水)オーストラリア、スロバキア

6日(木) トルコ、フランス 7日(金) デンマーク、ベトナム

(報告:尾中夏美)

海外派遣のための語学支援

1. スーパー・イングリッシュ、ステップ・アップ・イングリッシュ

1.1 事業内容

これまで留学準備コースとしてスーパー・イングリッシュを実施してきたが、受講資格を満たしている参加者であっても英語基礎力が予想以上に低いため、今年度よりスーパー・イングリッシュの前段階として基礎力をつけるステップ・アップ・イングリッシュを新たに立ち上げた。

スーパー・イングリッシュは留学準備のための英語集中コースとして位置づけ、大学の教室を使用するが大学のカリキュラムには組み込まれていない。短期間での効果を上げるために受講資格を設けた。概要は以下の通りである。

開講期間(11週間): 前期 4月14日~7月11日、後期 10月1日~12月22日

受講料:無料

ステップ・アップ・イングリッシュ(SUE)

授業時間:月、水の18時20分~19時50分

受講資格(前期):①海外への留学・インターンシップをめざし、修了後は Super English の受講を希望する者。②TOEFLiBT の受験を予定している者。①と②のどちらかに該当する者で、課題をこなし、 欠席せずに積極的に受講する意欲があると認められる者。

受講資格(後期):①将来海外への留学・インターンシップ、研修をめざし、修了後はスーパー・イングリッシュの受講を希望する者。②CASECを受験し700点以上のスコアを出せた者。①②の両方の条件を満たす希望者から優先的に受講を認める。余席がある場合には②のみの条件で申し込み順で認める場合がある。

募集定員:12名

スーパー・イングリッシュ(SE)

授業時間:水、金の18時20分~19時50分

受講資格:①以前にスーパー・イングリッシュを受講したことがあり積極参加が認められた者。②ステップ・ アップ・イングリッシュの修了者。①と②どちらかに該当する者で、課題をこなし、欠席せずに 積極的に受講する意欲があると認められる者。

募集定員:5名

スーパー・イングリッシュは継続して同じ外部講師、ステップ・アップ・イングリッシュは学内非常勤講師が担当した。いずれも英語を母国語とする英語教育の専門教員で、英語圏で実施されている ESL プログラムに準じた構成である。授業は全て英語のみで実施した。前期はステップ・アップ・イングリッシュの参加資格に英語力の条件をつけなかったが、参加者間の英語能力に大きな開きができた結果、講師が能力の低い参加者への対応に労力を取られ、他の受講者から不満が出されたため、後期は学内で誰でも無料で受験できるオンライン英語能力判定試験CASECを活用して、参加条件に一定の英語水準を追加した。

受講者数は表1の通りである。

表 1. 受講者数

		2008 年度前期					2008 年度後期					
SUE	所属学部	人社	教育	工学	農学	合計	人社	教育	工学	農学	県大	合計
	人数	2	3	1	6	12	1	3	0	0	1	5
SE	所属学部	人社	教育	工学	農学	合計	人社	教育	工学	農学	県大	合計
	人数	2	1	1	0	4	2	0	2	1	0	5

今年後期からいわて5大学コンソーシアムのメンバー大学である県立大学の学生が参加した。

ステップ・アップ・イングリッシュは単なる英語の課外授業となることを避け、一定以上の英語力がすでにある 参加者を対象とするため、後期からCASECを課すことにした。そのため、期日までに所定のスコアを出すこと ができず参加者が5名に減少したものと見られる。ステップ・アップ・イングリッシュのレベルを作ったことで、スーパー・イングリッシュではハードルが高すぎる学生対象に基礎練習が可能となった。このレベルでしっかりとした 学習態度と能力を示せた学生が、講師より推薦を受けてスーパー・イングリッシュの受講資格を得ることになる。

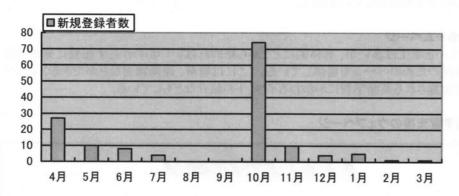
1.2 課題と今後の取り組み

ステップ・アップ・イングリッシュ担当の講師が1年で変わることになったので、ステップ・アップ・イングリッシュとスーパー・イングリッシュがうまくリンクして機能できるシステムをできるだけ早い段階で作り上げることが重要である。

2. リーディング・マラソン

2.1 事業内容

リーディング・マラソンは難易度によって6レベルに分けられた読み物をそれぞれ最低400ページずつ読破していき、1年間で6レベルの読み物を読み終えるというプログラムである。2006年度の開始から3年目を迎えて徐々に知られるようになり、登録者数も少しずつ伸びてきた。現在週2回曜日と時間を決めて貸し出し業務をしている。授業や実験などでどうしても公開貸し出し時間に来られない学生に対しては個別に対応している。2008年度の新規登録者数は以下の通りである。



10月の新規登録者数が74名と一気に増えた。これは一部の英語教員がリーディング・マラソン登録を授業の一環として取り入れようと試みた結果である。このような事態を想定していなかったため貸し出し用の本が著しく不足した。授業への取り組みは本事業の主旨とは異なるため、一般の授業への取り入れはしないように教員に申し入れた。このような形で登録した学生は継続率が著しく低いことから、自ら目的意識を持って登録することの意義を再確認した。

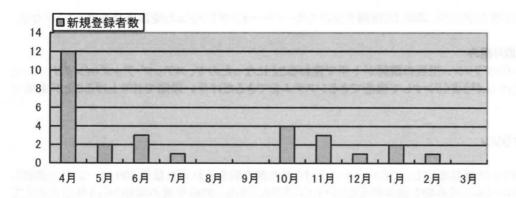
2.2 課題と今後の取り組み

これまで教員が実施していた貸し出し業務を今年度からは補助職員が貸し出し業務を実施したが、煩雑な作業が多いため対応にはかなりの労力がかかる。例えば、貸し出してから半年も返却をせず、督促メールや直接電話で話してもなかなか返却しないというケースも少しではあるが存在する。本を紛失してしまったという場合には弁償してもらうよう働きかけることも必要となり、このような対応に手間がかかるので、今後効率的かつ持続可能なシステム作りを工夫していく必要がある。

3. リスニング・マラソン

3.1 事業内容

昨年度立ち上げたリスニング・マラソンは年間登録者数 13 名だったが、今年度は周知が広く行えたため、登録者数が 42 名に増えた。以下が新規登録者数の推移である。



3.2 課題と今後の取り組み

リーディング・マラソンと同時に登録する学生が多いので、貸出日をそろえることで省力化を図りたい。教材の管理や整理の負担が大きいので今後改善していきたい。

4. 英語学習支援のためのホームページ

英語力を付けたいと考えている学生は多いが、具体的にどこから始めればいいかわからず相談に来る学生がいることから、英語学習支援のためのページを提供している。ここには聴解、速読練習などができるウェブページへのリンクの他、学内で実施される英語学習にかかわるイベントの紹介などもしている。

写真 1. 英語学習支援のウェブページ

英語学習支援のページ

このページは大学4年間の間に英語をモノにしたい人のための支援ページです。英語を学ぶ方法は色々ありますが、自分の目的やレベルにあったものを見つけてください。

<<英語試験準備用問題集貸し出しについて>>

国際交流センターではみなさんが様々な英語の能力検定試験にチャレンジできるように、問題集の貸し出しを2008年4月から実施します。貸し出しする問題集は以下のものです。貸し出し期間は2週間で、申請すれば延長も可能です。ぜひ利用してください。貸し出しの場所は学生センター棟2階国際課隣の教員室です。貸し出し希望の方はonaka@iwate-uac.jpまで「英語問題集貸し出しについて」というタイトルをつけてメールしてください。

TOEFLの問題集

- 1. The Official Guide to the New TOEFL iBT (CD-ROM付)
- 2. ロングマン・パーフェクトパックTOEFL iBT (CD-ROM付)
- 3. Essential Words for the TOEFL

TOEICの問題集

- 1. 新TOEIC TESTリスニング問題集(CD付)
- 2. 短期集中講座TOEIC TESTリスニング(CD付)
- 3. 新TOEICテストまるごと模試600問(CD付)
- 4. Essential Skills for the TOEIC Test Listening(CD付)

英語検定の問題集

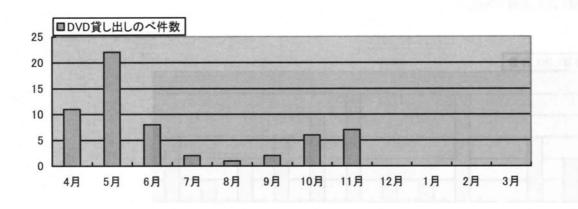
- 1. 英検準1級全問題集(CD付)
- 2. 英検2級全問題集(CD付)

5. イングリッシュ・DVD・ライブラリー

5.1 事業内容

米国から購入した英語の DVD をリージョンコード1対応のポータブル DVD プレーヤーを付けて貸し出すとい

う内容で、好きな映画を英語音声と英語字幕で鑑賞することで、楽しく英語を勉強してもらおうというのがこの事業のねらいである。貸し出し期間は1回4日間で、のべ59人が利用した。以下が今年度の利用実績である。



5.2 課題と今後の取り組み

今年度は貸し出し用DVDプレーヤーを3台から7台に増やし、貸し出しも4日間にすることで、自宅に持ち帰ってビデオを鑑賞したいという要望に応えることができた。今後はもう少し事業の周知にも力を入れたい。

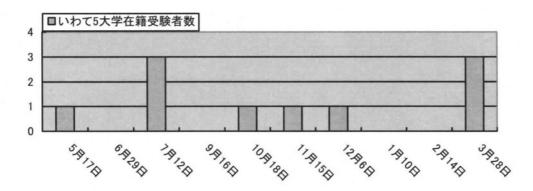
6. TOEFLiBT®(インターネット版)試験岩手会場の運営(岩手5大学事業)

6.1 主旨

英語圏の協定大学への交換留学を希望する学生は TOEFL スコアの提出が求められるが、TOEFLiBT®の 試験会場が東北には不足していることから、受験希望者は東京まで行くことを強いられ、経済的、身体的負担 が大きい。そこでいわて 5 大学の事業の一環として、岩手県立大学と本学国際交流センターが協力して昨年 度から受験地を共催することにした。本事業は昨年度の国際交流センター外部評価においても、実施が評価されている。

6.2 事業実績

試験会場として利便性の高い岩手県立大学アイーナキャンパスパソコン演習室(20 台設置)を使用している。 いわて 5 大学の学生の受験状況を把握するために、いわて 5 大学に在籍する受験者には任意で情報提供を 呼びかけた。



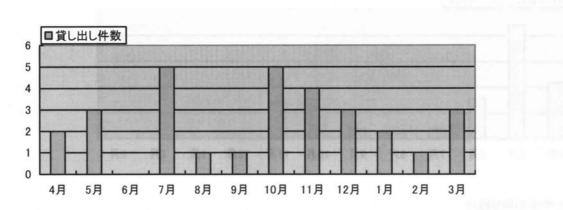
6.3 課題と今後の取り組み

受験日は土曜日に設置されているため、本事業を担当する大学担当者への負担が大きい。また、日程を多く設定しても必ずしも満席にならず、その中に占めるいわて 5 大学在籍者の割合がかなり低いことが課題として挙げられる。

次年度に向けて、省力化を図るためにニーズの高い日程に絞り、同時にいわて5大学在籍者用の受験枠を 設定して、5大学連携の枠内で積極的に本事業を広報すると共に、受験しやすい環境を作っていきたい。

7. 語学学習のための教材の貸し出しサービス

英語能力試験の受験準備のための学習教材の貸し出しサービスを実施した。特にTOEFL受験用問題集は大変高額なものが多いので、受験を予定している学生にとっては利用価値が高い。のべ利用者数は30人で、以下が貸し出し実績である。



(報告:尾中夏美)

国際交流センターの海外向け広報活動報告

1. 海外でのPR活動と情報収集の意義

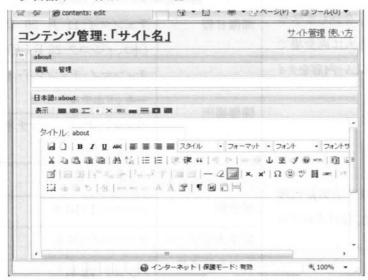
日本の大学への留学を希望する者の多くは、東京などの大都市圏に留学を希望する。生活費がかかるもののアルバイトが地方に比べて豊富にあるし、日本語学校などが集中していることもその要因であろう。しかし、地方大学の実情についての情報不足や偏見なども多分に作用していることが留学フェアなどに参加してみて推測される。知名度が低く偏見を持たれた大学に、熱意ある質の高い留学生が出願してくれることを期待するのはあまり現実的ではないだろう。大学についての正確な情報を発信するとともに、留学を希望する学生にどのようなニーズがあるのかを把握し、的確に必要な情報を提供することが重要である。

2. 多言語ホームページへの取り組み

国際交流センターではセンターのホームページ上に多言語のウェブページを載せている。現在日本語、英語を含めて10カ国語対応しており、さらに日本語がまだ上級レベルに達しない人向けのやさしい日本語での対応もある。

多言語ホームページの更新作業は、基礎データを日本語で作成し、それを元に留学生に各国語への翻訳を依頼するという方式で行ってきた。しかし、多言語対応のウェブページを作成してから時間が経つとともにサーバーへのアップロード操作など、基礎知識を持たない学生には作業が困難になってきた。そこで、今年度作業手順を簡略化できるよう、開発者と相談しながらプログラムの改善を行った。その結果、基本操作がワードファイルの作成手順とほぼ同じになったため、今後内容の更新作業がより頻繁に行えるものと期待している。

多言語ウェブ作成のための管理ページ



3. 日本留学フェア

3.1 韓国

韓国で開催された JASSO(日本学生支援機構)主催の日本留学フェアは釜山とソウルの二会場で一日ずつ開催された。 教員1名、事務職員1名で対応した。今年度は韓国出身の本学大学院生に通訳として来訪者への対応をしてもらった。また、本学への元交換学生などが数多く応援に来てくれ、本学の魅力を熱心にPRしてくれた。

フェアの合間に協定大学である明知大学校を訪問 し、日本語を専攻する学生対象に留学説明会を実施 した。

日本留学フェア(韓国)概要					
開催日程	釜山:9月6日(土)、ソウ				
	ル:9月7日(日)				
Lann and	釜山:釜山展示コンベンシ				
111/W 111 元	ョンセンター				
開催場所	ソウル:展示コンベンション				
	センター				
フェア全体の来	釜山:2298名				
場者数	ソウル:4380名				
岩手大学ブース	釜山:59名				
への来訪者数	ソウル:125名				

来場者の傾向と関心

- 1. 親子での来訪者が多い。
- 2. 地方であっても国立大学であることに価値を置く。
- 3. 基本的知識を持った上で来場し、ホームページであらかじめ情報を入手し、本学ブースを最初から訪問リストに入れている来訪者が増えた。これは毎年岩手大学が留学フェアに参加している成果と見られる。
- 4. リピーターが増えた。

3.2 タイ

(1)日本留学フェア

教員1名、事務職員1名で参加した。今回も本学卒 業生で毎年通訳などで手伝ってくれる人に両会場で 通訳をしてもらった。資料は学科の詳しい内容をタイ 語に翻訳した冊子で準備した。

(2)協定校等の訪問

チェンマイ大学訪問

日本語教員とリサーチ・国際関係担当学部長代理 と面会し、チェンマイ大学の学生派遣、受け入れプロ グラムなどの可能性について協議した。

日本留学フェア(タイ)概要					
開催日程	チェンマイ:11 月 20 日				
	(木)、バンコク:22 日(土)				
	チェンマイ:チェンマイ・オ				
即爆担記	ーキッドホテル				
開催場所	バンコク:インターコンチネ				
	ンタルホテル				
フェア全体の来	チェンマイ:568名				
場者数	バンコク:1710 名				
岩手大学ブース	チェンマイ:86名				
への来訪者数	バンコク:72 名				

サイアム大学訪問

2 月に実施する「ヤングリーダーズ国際研修 in いわて」プログラム概要の説明と同プログラムへの学生、教員派遣を依頼した。

3.3 ベトナム

(1) 日本留学フェア

岩手大学卒業生がハノイ、ホーチミン両会場においてベトナム語で対応してくれた。

今回のフェアには工学部フロンティアから2名、応用 化学から1名の教員が参加し、工学部系の質問への 対応を担当してもらえたので、研究面でのきめ細やか な対応ができた。

(2) 大学訪問

11月17日(月)に工学部教員とともにホーチミン工 科大学を訪問した。学科間の協定を視野にいれた研 究者交流、学生交流の可能性について協議した。大 学内の施設の視察も行った。

日本留学	フェア(ベトナム)概要
開催日程	ハノイ:11 月 15 日(土)、
	ホーチミン:16 日(日)
ng Physical	ハノイ:メリア・ハノイホテル
開催場所	ホーチミン:ニューワール
	ドホテル
七日	ハノイ:806 名
来場者数	ホーチミン:1027 名
岩手大学ブース	ハノイ:46 名
への来訪者数	ホーチミン:79 名

3.4 NAFSA(米国国際教育学会)

JASSOが用意した日本の大学の集合展示ブースで、本学に割り当てられた時間帯にブースにおい

て説明を行った。会場では事前申し込みを必要とするワークショップ、当日参加の研究発表などが数多く 用意されていて、国際教育関係者の研鑽の場ともなっていた。

韓国、米国の協定大学の教職員が展示場で岩手 大学のブースを見つけ、立ち寄ってくれたので、情報 交換ができた。

日本留堂	学フェア(北米)概要
開催日程	2007年5月26日(月)~
	28 日(木)
開催場所	ワシントン DC コンベンショ
	ン・センター

4. 進学説明会

主 催 独立行政法人 日本学生支援機構(JASSO)

日 時 6月29日(日) 10時 ~ 16時

会場 サンシャインシティ 文化会館 2F展示ホール D

参加者 早川 智津子 国際交流センター准教授 石沢 友紀 国際課国際企画グループ主任 参加大学 149 校(私立大学、短期大学を含む)

総入場者数 2030 人(H17 年 1314 人、H18 年度 3039 人、H19 年度 2548 人)

岩手大学会場訪問者(記帳者のみ)

外国人学生

①総計:44名(H17年16名、H18年43名、H19年39名)

②国別:中国(19名)、韓国(6名)、マレーシア(10名)、ベトナム(4名)、 モンゴル(2名)、インドネシア(1名)、台湾(1名)、イスラエル(1名)

③学部別:

人文社会科学部(26名): 心理学、人間学、経済学、経営学、

日本文化、英語学など(編入学希望者1名、大学院希望者1名)

教育学部 (4名):教育学、日本語教育、工業デザイン、アニメ

(13名): 応用化学、電気電子学、機械学、土木工学、情報工学など

農学部 (1名): 獣医学

日本語学校等来訪者 総計:4名

工学部

主な相談事項

大学概要: 岩手大学の位置、駅からの距離、周辺環境、就職状況について

入試について :入試科目、手続きについて

入学割合・・・受験者数に対する合格率

日本語留学試験のボーダーライン

入試に英語成績(TOEFL など)が必要かどうか

入学願書と共に提出しなければならない必要書類

過去問の取得ができるかどうか

芸術文化課程の実技試験はどんなことをやるのか

面接試験ではどんなことを聞かれるのか

納付金 : 学費、入学金など

授業料、入学料の額、及び減額、免除について

奨学金について:奨学金の種類と募集人数

生活状況について:生活費、アルバイトの環境

宿舎について : 入居状況、家賃など

その他の質問事項:盛岡の気候、地震の影響、東京からの距離など

全体的な感想

・ 1人あたり約15分の説明を必要とするため、ほぼ休みなく説明をおこなった。

マンバスの国際化支援事業報告

- 昨年度同様に今年度もPCを持ち込み、インターネットを使用できる環境を導入した。インターネットを使用して説明する事は少なかったが、「ガンダイニング」のネット映像を配信したり、国際交流センターの多言語ホームページを紹介することに役立った。
- ・ 今年度より、概要説明用のプレゼンテーション資料(パワーポイント)を作成したが、大学の写真や、研究生の出願手続の説明など、大変役に立った。
- 大学の場所や入試のレベルなど基礎的な質問が非常に多かった。特に日本語留学試験の得点率に関する質問が多かった。入試課には具体的な点数等の開示は控えるように言われているものの、何かしらの説明ができないと苦しい部分があった。
- 文系(経済学、経営学)の希望が相変わらず多数を占めたが、例えばベトナム=工学など、 国籍によって興味に特徴があるのが印象的だった。
- ・ 残念ながら、岩手大学や盛岡市のことを知らない学生は非常に多い。しかし、大学が県 庁所在地にあり中心市街地から近いこと、ワンキャンパスであること、植物園など学内の自 然環境が大変豊富であることなどについて、写真や地図等も組み合わせて説明したとこ ろ、興味を示してくれる学生が多かった。こうした説明に加えて国立大学の学費の安さ、 アパート等の家賃が安いことなどを併せた説明を行っていくことが、私費留学生にとって は最も効果的ではないかと感じた。

(報告:尾中夏美)

キャンパスの国際化支援事業報告

1. 研修会:英語プレゼンテーション研修

1.1 主旨

昨年度に引き続き、要望のある英語プレゼンテーション研修を実施した。昨年度はプログラムを購入するという形式で実施したが、今年度は本学の非常勤講師との綿密な打ち合わせの元、プログラムを独自に実施した。

1.2 概要

日時:2008年12月19日(金)午後1時~4時30分 2009年1月7日(水)~9日(金)午前9時~午後4時30分 1月15日(木)午前9時~午後2時30分

場所:情報メディアセンター図書館2階生涯学習・多目的学習室

講師:ギャビン・ヤング(岩手大学非常勤講師)

募集定員:12名

参加者数:4名(内訳:教員2名、大学院生2名)

参加費:無料

経費負担:国際交流センター経費

1.3 内容と参加者の評価

研修はすべて英語で行われた。全ての日程に参加できる参加者が大変少なく、最終日の成果発表では教員 1名、大学院生1名の2名しか発表できなかった。しかし、最後まで参加した参加者は人数が少ない分個別指 導が受けやすくなったことなどもあり、この研修会の内容に満足している様子であった。

1.4 今後への課題

日程にあたっては参加者拘束時間を前年度より短くすることにより参加しやすく、また時期的な問題も考慮に入れた。しかし、このような研修会の開催を求める声があるものの、結果として参加者が2年連続で大幅な定員割れを起こしている現状を鑑み、今後このような事業を継続するかどうかも含めて検討すべきである。

2. 講演会

今年度は本学大学教育センターとの共催で第27回ESD銀河セミナーの一環として講演会を開催した。本講演会は二部構成で実施した。内容は以下の通りである。

日程:11月28日(金)

講師:北海道情報大学経営情報学部准教授 有道出人

<第一部>

タイトル:「日本人」とは何だろう-アメリカ系日本人から見た過去・現在・未来

時間:午後2時45分~3時45分

使用言語:日本語

<第二部>

タイトル: What is Internationalization in Twenty-First Century Japan?

時間:午後6時20分~7時50分

使用言語:英語

3. 留学生パートナー事業

今年度登録制の留学生パートナー事業を開始した。留学生パートナーは留学生ラウンジに毎日ボランティアが交代で待機して留学生の様々な相談に応じるほか、国際交流センターが実施する様々な留学生事業を支援した。課題としては、学期始めの繁忙期には需要があるものの、それ以外の時期に活動が停滞してしまうことであった。イベントとして日本料理を一緒に作るといった体験型事業も企画したが、次年度はパートナーの配置方法も含めて再検討する必要がある。

4. 国際交流センター事業のPRと国際週間の実施

国際交流センターでは日本人学生、留学生対象に様々なプログラムを実施しているが、その活動の周知が 不十分であった。そこで、昨年度に引き続き4月に新入生対象に1枚もののチラシを配布した。

今年度は11月4日(火)から7日(金)を国際週間と位置づけて海外留学支援事業の項目で報告する国際ボ ランティアプロジェクト参加者による体験発表会を実施した。

*国際週間の内容の詳細については「海外留学支援事業」の項参照。

チラシ

かれた文章を楽に読めるように い。 なるためのプログラムです。1 自分のペースで難易度の低いものから、 徐々に難しく、長い小説をよめるようにス テップアップしていきます。自分の好みの 内容の本を、高校1年生レベルから少しず つ上げていくので、無理なく続けることが できます。これまでにのべ100名の学生 がこのマラソンに登録しました。詳細はポ スター、HPをご覧ください。

スニングマラソンは英語のス トーリーを楽しみながら聞いて 1年間かけて英語の聞く力を自 然に身につけようというプログ ラムです。中学生レベルから少しずつレベ ルを上げていくので、無理なく続けられま す。詳細はポスター、HPをご覧くださ

-バー語学(中国語・英語)は 中国語圏、英語圏への交換留学 に必要な語学力養成コースで す。中国語は留学前準備支援 コースとして開講します。英語はインター ネット版TOEFL受験のための特訓コースの Sugar Englishと、その前段階で基礎固めを するStap-Up Englishに分かれています。内 ログラムがあるか、体験者の声を直接聞い

ディングマラソンは英語で書 容についてはポスター、HPをご覧くださ

年間かけて、マラソンのように スで難易度の低いものから、 く、長い小説をよめるようにス リスニング練習ができるページ や、英語のタイピングが苦手な人向けに、 練習ページにリンクを貼っていますので、 国際交流センターのHPの「英語学習支援 ページ」を活用してください。

> nglish DVD Libraryは英語の 映画を楽しみながら英語力アップ をめざします。米国から直輸入の DVDにより英語を聞きながら英 語の字幕を読めるので、聞き取りが苦手で も大丈夫。ちょっとついていけない部分は 何度でも聞き返し可能です。貸出の場所や ルールについてはポスター、HPをご覧く

学相談は留学したいかも・・と 迷っている印味もころ 短期語学研修やワーキングホリ デーの相談、英語カアップの相 談などにも応じます。担当教員が対応しま すのでメールで都合のいい時間を知らせて ください。岩手大学にどんな留学、研修プ

ていただくために、海外留学・研修オリエ ンテーションを例年5月中旬に開催しま す。日程や場所などについてはポスター、 HPでお知らせします。

内質学は日本にいながらにして アメリカ人大学生と一緒に、彼 らが基準で使います。 らが英語で学ぶ授業に参加でき るプログラムです。毎年協定大 学であるアーラム大学の学生が、岩手大学 で日本語を学ぶ傍ら、アーラム大学教員の 授業も受けるので、これを聴講します。 閉 講される授業内容は毎年違います。 6月ご ろから募集しますので、ポスター、HPを ご覧ください。

流イベントを年間たくさん企画 します。留学生と日本語で交流 して友達になるのもよし、英語 して友達になるのもよし、英語 ▼ を使って英語圏からの学生と親 交を深めることもできます。

<<主な交流事業>>

- ・岩大留学生との国際交流ガーデン バーティ
- ・米国アーラム大学生とのハローバー ティー
- 米国アーラム大学生とのイングリッ シュ・カフェ

(報告:尾中夏美)

危機管理マニュアル策定の取組み

1. 岩手大学の学生の国際交流に係る危機管理マニュアルの策定について

1.1 マニュアル策定の趣旨(危機管理の必要性)

本学においては、学生の留学、海外ボランティア、海外インターンシップなどを促進しており、これらに意欲をみせる学生が増えてきている。また、外国からの留学生の数も増えてきており、平成 20 年度末現在約 200 名の留学生が本学に在学している。

このような本学における国際交流の進展に伴い、国際交流に係る危機管理の重要性は増している。

マニュアルは、本学として行うべき国際交流に係る危機の予防および危機発生時の対応について策定するものである。

1.2 マニュアル策定の取組み

平成 19 年度においては、先行事例としての他大学策定のマニュアルおよびその他の研究成果等を参考にしつつ、国際交流の危機管理に係る項目等の整理を行ったうえで、本学のマニュアル策定へ向けての原案を作成した。

これをもとに、平成 20 年度において、国際交流センター長、国際交流センター専任教員及び国際課職員との間で原案について討議を重ね、修正を行った。

平成 21 年度においては、国際交流センター運営委員会に諮り、学内の関係部局等との調整を 行ったうえで、本学のマニュアルを策定する予定である。また、マニュアル策定後は、これに基づき、 教職員向け・学生向けハンドブックなどツールの整備を順次行っていくことになる。

2. マニュアル(案)の内容

2.1 マニュアルの対象

マニュアルが対象とする国際交流は、大学の事業として行う①学生の海外派遣および②留学生の受入れである。

2.2 マニュアルの危機管理の範囲

マニュアル(案)では、危機管理の範囲を下記表のとおりとした。

なお、留学生の受入れに関し、危機発生の事後対応(下記表の※で示した部分)については、 基本的には、本学の危機管理についての全学的取決めである「岩手大学危機対策要項」およびこれに基づく「岩手大学危機対策マニュアル」に基づき、本学学生として、一般学生に対するのと同様の対応が求められる(これについては、マニュアルでは検討の対象としない。)。ただし、留学生の特性に基づいた対応が必要なこともあるので、マニュアルでは、そのような部分に限って取り上げた。

表: マニュアルの危機管理の範囲

危 機	事 前	事 後 (発生時含む)
学生の海外派遣	予防	対 応
留学生の受入れ	予防	対 応(※)

2.3 マニュアルの項目

マニュアル(案)で取り上げた項目(目次)は、以下のとおりである。

岩手大学の学生の国際交流に係る危機管理マニュアル(案)

目 次

岩手大学の学生の国際交流に係る危機管理マニュアルの策定について

- 1. 本マニュアルの対象と範囲
- 1-1 本マニュアルの対象
- (1)学生の海外派遣
- (2)留学生の受入れ
- 1-2 本マニュアルの危機管理の範囲
- I 学生の海外派遣
- 1. 予防措置
- 1-1 派遣前オリエンテーション等の実施
- 1-2 手続き・連絡体制等
- 1-3 派遣先大学との連携・協力
- 2. 危機発生時の対応
- 2-1 危機管理の対象となるケース
- 2-2 基本的対応方針
- 2-3 ケース別対応
- Ⅱ 留学生の受入れ
- 1. 予防措置
- 1-1 受入れオリエンテーション等の実施
- 1-2 手続き・連絡体制等
- 1-3 大学が措置する支援「救援者費用の一部支援」
- 2. 危機発生時の対応
- 2-1 危機管理の対象となるケース
- 2-2 基本的対応方針
- 2-3 ケース別対応

附属資料

別紙1:岩手大学における学生の国際交流に係る危機対策本部の体制

別紙2:学生の海外派遣時の危機管理対応

別紙3:留学生に対する危機管理対応

別紙4:事件・事故等発生時の対応

別紙5:海外派遣の実施、中止、延期、継続、途中帰国の基準(ガイドライン)

別紙6:(様式1)留学・研修届

別紙7:(様式2)調査票

別紙8:海外渡航時の派遣先国の安全確認のためのお勧めリンク集

以上

(早川智津子 国際交流センター)

平成 20 年度がんちゃん国際フォーラム開催報告

1. がんちゃん国際フォーラム開催趣旨

本講演会は、国際舞台の一線で活躍する有識者の講演を通じ、本学学生がグローバル化のなかでの地域のあり方を考え、実践する(いわゆる「Think globally, act locally」)きっかけとして、国際的なセンスを磨くことを助けることをもって、本学の目指す持続可能な社会づくりの担い手となる国際理解力のある人材育成に資することを目的としている。

なお、フォーラム名称に岩手大学のイメージキャラクター「がんちゃん」を冠することにより、学生に親しみを感じてもらうことを狙った。さらに、がんちゃんの角のように国際理解に対する知的好奇心のアンテナを高くかかげ、国際的に通用する情報受信力・発信力を養ってもらいたいという願いを込めている。

2. 開催概要等

2.1 講演会概要

・ 名称: 第2回がんちゃん国際フォーラム講演会

・ 主催: 岩手大学国際交流センター

開催日時: 平成21年1月19日(月) 10:30~12:00 (90分) (10:15 開場)

• 開催場所: 岩手大学 図書館 2F 生涯学習・多目的学習室

・ 講演者: 池田 勝也 前駐タンザニア特命全権大使

講演テーマ: グローバル化のなかの国際理解

「アフリカと日本ータンザニア駐在で見たアフリカ」

・対象者: 学生、教職員及び一般市民、参加者約80名(定員60名) (学生を主たるターゲットとし、教職員、一般市民も参加可能とした。定員に達したため、当日は補助席を増やし対応した。)

2.2 PR 及び関係機関への周知等

PR のため、学内に本講演会ポスターを掲示するとともに、学生向け PR チラシを作成し、関連する分野の教員を通じ学生への配布を依頼した(ポスター等は学内印刷機で作成することにより、経費節約に努めた。)。また、岩手大学ホームページの「イベント情報」掲載及び報道機関へのプレスリリースを行った。併せて、県内関係機関(岩手県、岩手県国際交流協会、県内他大学)へ周知を行った。

3. 実施報告

3.1 講演の概要

日本とアフリカの関わりの 歴史、アフリカ開発問題、日本 にとってのアフリカといった諸 点について、講師の大使として 在勤した経験を交えた講演がな された。

アフリカの貧困について、 水・電力不足、エイズやマラリ アの蔓延、部族紛争などと並ん でカカオ栽培・エイズ孤児等に みられる児童の悲惨な状態の例 などが説明された。この様な状態に対する世界の対アフリカ援 助の潮流についても説明がなされ、その中での日本の援助の実態について解説され、日本に対する期待の高さが紹介された。



岩手日報 2009 年 1 月20日朝

また、エイズ孤児の施設訪問、文化交流、援助の調査など、大使館の仕事についても写真を使って紹介された。さらに、現在の日本アフリカ関係は援助を別にすると細々としたものだが、今後のありかたを考える際には、東アジアが経済発展の結果として資源・素材の供給地から消費地に変わりつつあるので、新たな代替供給地としてのアフリカの可能性を視野に置く必要があるとされた。最後に、日本アフリカ関係の歴史もそうであったが、世界はダイナミックに変化し続けていて、その変化にいかに適応していくかが日本の生き残りのために重要であり、内向きと云われている日本の若い世代もその動きの中に自ら飛び込んでほしい、と学生にエールを送った。

い」と学生にエール

なお、講演会の状況が、地元紙2紙(岩手日報、盛岡タイムス)に掲載された。

3.2. 参加者数及びアンケート回答者

参加者数約80名

アンケート回答者数 57 名 (回収率 71.2%)

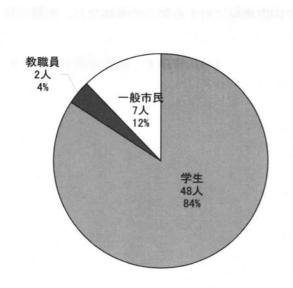
3.3 アンケート集計結果

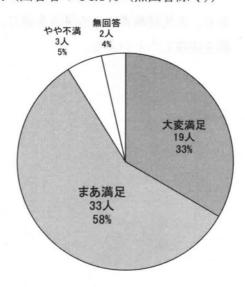
(1) 参加者属性(回答者 57 名)

回答者のうち、学生はすべて岩手大学生。

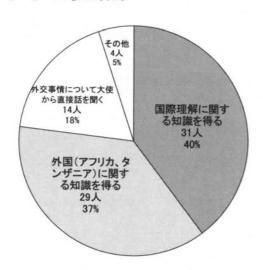
(2) フォーラムの満足度

満足(大変満足+まあ満足)と答えた人 52人(回答者の94.5%(無回答除く))

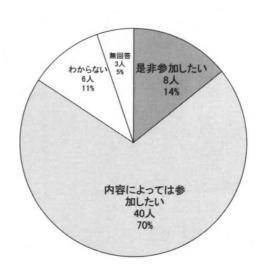




(3) フォーラムの参加目的



(4) 今後のフォーラムへの参加希望



(5) 感想など自由回答(抜粋)

- ・(一般) 観光案内的な事より今回のような外交事情の話しは大変よかったと思う。
- ・(教員) アフリカのおかれた状況の全体像がよくわかりました。ありがとうございます。
- ・(学生) アフリカの貧困の深刻さを改めて実感した。水を手に入れることすら難しいなん て、日本に住んでいる私には全く想像できません。先進国のみだけが悪いとか、責任のこ とばかりに目を向けず、先進国と発展途上国が相互に助け合い、思いやる精神を持たなけ

れば、解決に向かわないと強く感じました。

4. 所感

今回の講演会は、学生中心に多くの参加を得たうえ、アンケート結果からも明らかなと おり、大使経験者による講演を通じ、学生の国際理解に対する関心の喚起など、初期の目 的を達成したといえる。

(早川智津子 国際交流センター)

北東北国立3大学外国人留学生合同合宿研修会報告

1. 実施概要

秋田大学、岩手大学、弘前大学では、留学生教育の連携を図ることを目的とし北東北3大学合同合 宿が平成 16 年度から行われている。今年度は第5回目となり、弘前大学を幹事大学として次のような 内容で実施された。

期 間: 2008年11月1日(土)~11月3日(月・祝)

場 所: 青森県立梵珠少年自然の家(青森県五所川原市)

参加大学: 秋田大学 15名(学生14名 引率1名)

弘前大学 15名(学生 14名 引率1名)

岩手大学 14名(学生13名 引率1名)

計 44 名

2. 研修内容

2.1 スケジュール

11月1日(土)

13:30	弘前駅集合→バスで会場へ移動
14:00~17:30	オリエンテーション・異文化トレーニング
17:40~18:40	夕食
19:00~21:00	課題発表&グループ分け(スキット作成)
21:00~22:00	自由時間(入浴)

11月2日(日)

6:30	起床·洗面 宿泊室清掃
7:30~ 8:30	朝食
9:00~12:00	課題活動(1)
12:00~13:00	昼食
13:00~17:30	課題活動(2)
17:40~18:40	夕食
19:00~21:00	発表・振り返り
21:00~22:00	自由時間(入浴)

11月3日(月)

6:30 起床·洗面·宿泊室清掃

 $7:30 \sim 8:30$ 朝食

9:00~10:00 アンケート実施・総括

10:30 解散

<研修の目的>

昨年度に引き続き、多文化状況におけるコミュニケーションに必要な知識、技能や具体的な課題に ついて参加者に体験的に学ばせるために合宿研修を実施した。

2.2 合宿の様子

昨年度同様、グループによる共同作業を体験させるため、「勇気」をテーマにした短いビデオスキッ ト作りに取り組ませ、2 日目夜には成果発表をした。参加者は途中、アンケートに回答する形で各自の 作業やグループについて内省し、多文化状況でのコミュニケーションに対する各自の技能や態度につ いて学んだ。今回は岩手大学からフランス、ロシアの学生が、弘前大学からはルーマニアの学生が参 加し、より広範囲の多文化状況になった。また、途中、青少年の家の職員によるレクリエーション活動 や散策、体育館でのスポーツの時間もとり、リラックスした交流の場が確保され、3 大学の学生同士の 交流が広がった。

3. 学生の反応(アンケート結果より)

学生の反応は例年通り、好評であった。普段は近くにいてもなかなか話す機会のない学生同士でも、 宿泊して長時間一緒にいることによって、関係に変化が現れるようである。

まず、合宿の期間であるが、ちょうどいいという回答が過半数を占め、さらに、短すぎたと感じた学生 が2割に上った。時間を共有する楽しさを感じた現れであろう。宿泊施設は青少年の家を使ったが、規 則が厳しいところもあり、また風呂やベッドについての不満もでていたが、宿泊料金の安さを勘案すれ ば妥当なものだと判断できるだろう。研修中、アイスブレークとしての異文化コミュニケーションゲーム、 共同作業としてのビデオスキット作成を行ったがそれについては、いずれも満足度が高く、合宿の成果 は達成されたと考えられる。感想の中にも、異文化に対する気づきや意識の変化、深い話し合いのお もしろさなどに対するコメントが多く、合宿に対する満足度が高いことが窺えた。

<アンケート集計結果>

1. 合宿研修の長さはどうでしたか。

ちょうどよかった 72%

長すぎた 7%

短すぎた 21%

2. 宿泊施設はどうでしたか。

よかった

17%

まあまあ

63%

ほかの施設がいい 20%

3. 研修内容はどうでしたか。

よかった 54%

まあまあ

39%

ほかの活動がいい 5%

なんでもいい

2%

4. 異文化コミュニケーションゲームはどうでしたか。

よかった 61%

まあまあ 37%

ほかの活動がいい 2%

5. 自由感想

I think it's very happy to have a joint camp with students from other universities. I just make many friends all round the world. I will remember the good time in here during my life.

たくさん友達ができたので、たのしかったです。

よりたくさんの人たちと交流できたので良かった。

たくさん話しをしました。勉強なりました。

他の大学のことを知れてよかった。

日本人どうしでもいろいろな出会いがあってよかった

国際的な問題をはなしあったりして、とても面白かったし、手応えがあった。この企画はとても良いと思う。

他の国の話しを聞いてよかったです。秋大には韓国人と中国人しかないので、おもしろかったです。

It was pretty nice to have some time with other people from other university...We can exchange our points of views about life, student life... And it's good to see other foreign students.

たくさん交流できて良かった。またこのような機会があれば参加したい。

いいと思う。

こんな機会はあまりないので参加して良かったと思います。

とてもよかった。ほかの国の大学生とのふれあいで異文化に対する認識が深まった。

楽しかったです。面白い人と会ったから。

とても大好きです。しかし日本語の能力が足りないのでちょっと困っています。

- one day in camp, -one day outside / walking the mountains and forest, -more sports

出会いって、ステキよね。

楽しかったです。

合宿の参加ははじめてでまだよくわかりません。

日本人とも外国人とも多く交流できた。今まで自分が持っていた外国人へのイメージが間違っていることがわかった。 た。みんないい人だった。

楽しかった。

他の国のことばや習慣を学ぶことができた。

習慣の違いを感じた。楽しかった。

いろんな学生と知り合うことができた。3大学合同だったけど、ちがう大学の人という感じはしなかった。全員と話すまではいかなかったけど、充実した3日間だった。参加してよかった。

さまざま国の人たちとふれあうことができ、とても楽しかった。スポーツ、食事そしてビデオ撮影といろいろな活動を通 して親睦が深められた。来年も是非参加したい。

色々な人々と出会ってすごく楽しかったです! みんな、違う大学なのでまた会える機会は少ないかもしれないが、遊びにいくよ!と言いながらそれを楽しみにする、その交流がとても楽しく、思い出になりました。

It was so nice meeting other people from other schools! I had a lot of fun knowing w/everyone! ありがとうございます

色んな人と触れあえて楽しかったです。

学校でよりいろいろな人たちと会えてすごくよかったです。いろいろな国のことを聞くことができました。

日本の他の大学の情況を知ることができ、そんな大学の雰囲気の中で育てられた学生たちのまじめさ、真剣さを見ることができて本当によかったです。

人数が多くてとてもたのしかった。

おもしろくて楽しい経験でした。

みんなと仲良くなることができた。みんな日本語が上手で、自分の外国語の勉強の足りなさがよくわかった。この合宿に参加してよかった。

いろんな人と出会っておもしろかった。

他の大学の人と知り合うことがほとんどなかったので、新鮮で楽しかったです。異文化についても留学生とお話をすることができてよかったです。本当に楽しくて楽しくて、この合宿に参加して良かったです。

とても楽しかったです!! いい経験になりました。来年も参加したいです。

はじめは「どうしたらいいかな~」という感じだったんだけど、みんなおもしろくていい人でまた親しげにしてくれたのでおもしろくていいい経験だったと思います。別れたくない~って感じT-T

4. 今後について

単なる交流事業を超えて、研修自体が学びの場として機能しており、参加した学生からは継続の要望が大きい。また、他大学からも合同の合宿をしたいという希望が寄せられており、多様な内容で研修が継続されるべきである。そのためにも、財政的措置をとるとともに、スタッフの負担についても配慮が求められる。

(文責:松岡洋子)

平成20年度岩手大学留学生実地見学旅行実施報告

- 的: 岩手大学に学ぶ留学生に対する教育活動の一環として、我が国の現状を実 際に見学し、留学生の日本に対する視野を広げるとともに、留学生相互の交 流によって今後の学習面及び生活面の充実に寄与することを目的とする。
- 2. 期 日:平成20年9月10日(水)~9月12日(金)(2泊3日)
- 3. 旅行先及び見学場所:栃木県・福島県

宇都宮:宇都宮城址公園

日光 : 東照宮・輪王寺、中禅寺湖・華厳の滝、

日光江戸村

会津 : 塔のへつり、大内宿、飯盛山

1日目 盛岡→宇都宮城址公園→宿泊 (鬼怒川温泉)

2日目 ホテル→東照宮・輪王寺→いろは坂→中禅寺湖→

華厳の滝→日光江戸村→ホテル (鬼怒川温泉)

3日目 ホテル→塔のへつり→大内宿→飯盛山→盛岡

4. 参加人員: 留学生 29名

内訳) 人文社会科学部·研究科 8名

教育学部·研究科

9名

工学部·研究科

5名

農学部·研究科

6名

連合農学研究科

1名

岡崎正道教授・早川智津子准教授・国際課職員八重樫

車中で、岡崎先生により今回の見学先に関する説明を交えて江戸時代の始まりから終わり までの説明がなされた。また、各見学地ではガイドによる説明や実際に見学することで理解 を深めた。参加者に今回の実地見学の感想を聞いたところ、楽しかったという意見が大半を 占め、日本の江戸時代を知るいい機会になったとのことだった。

平成20年度岩手大学外国人留学生スキー研修実施報告

- 1.目 的: 岩手大学に学ぶ外国人留学生が、母国で経験すること少ないスキーを通じて、雪国である岩手の冬に親しむ。更に、留学生相互、並びに教職員との交流を図り、留学生活の適応と留学生教育の効果を高めることを目的とする。
- 2. 期 日: 平成21年1月5日(月)~1月7日(水)(2泊3日)
- 3. 実施・宿泊場所:安比高原スキー場・安比グランドホテル

1日目 盛岡→安比高原スキー場 午後研修

2日目 安比高原スキー場 終日研修

3日目 安比高原スキー場→盛岡 午前研修

4. 参加人員: 留学生 37名

内訳)人文社会科学部 7名

国際交流センター

教育学部・研究科 12名

工学部・研究科 12名

農学研究科 2名

引率 早川智津子准教授、国際課職員高田、八重樫

期間中、2日目以外は好天に恵まれ、事故等なく、予定通り研修を実施することができた。 なお、2名の参加者が都合により2日間のみの参加となった。また、体力的な問題で2日目 の午後から参加を取りやめ、引率者と研修を見学した者も1名いた。

4名

研修を実施して気付いた点として、スキー用具収納用ロッカーについて、複数名で1つのロッカーを使用させたが、鍵が暗証番号式のため、使用者間で連絡不足により先に研修が終わった者がロッカーが開けられないという事があった。また、ホテルの部屋の鍵を持ったまま研修に参加し、鍵を紛失した者がいた。来年度以降は上記の点に注意してオリエンテーションを実施する必要があると感じた。

参加者の半数近くがスキー初体験だったが、感想を聞いたところ、「とても楽しい」、「もっと滑りたい」という意見が大半を占めた。また「新しい友達ができた」という者もおり、十分に目的を達成することができた。

岩手大学長と岩手大学外国人留学生代表との懇談会記録

(第1回)

日 時: 平成20年10月28日(火)16:00~17:30

場 所: 情報メディアセンター (附属図書館) 2階生涯学習・多目的学習室

出席者: 藤井克己学長、玉真之介理事・副学長、倉田裕理事・事務局長、大野眞男副学長・国際交流

センター長、大塚尚寛副学長

センター運営委員: 菅原正和教育学部教授、藪敏裕教育学教授、平原英俊工学部准教授 センター教員: 岡崎正道教授(司会)、尾中夏美准教授、松岡洋子准教授、中村ちどり准教授、

早川智津子准教授

事務職員:中島武幸研究交流部長、松井照雄学務部長、国際課職員

外国人留学生会: ティニスタノワ ジャニル、ムフンジャラガル バトトール、

マムン モハマド アブデュッラアル、ラビア ママット、

アジズルディン ビン ヤアコブ

中国人留学生学友会:李晏喬、韓波、王暁明

次 第: 1. 開会(司会)

2. 出席者紹介(司会)

3. 学長からのことば

4. 懇談

5. 閉会 (大野副学長・国際交流センター長)

テーマ:「外国人留学生のよりよい学習環境の構築のために」

内 容:国際課から外国人留学生の成績不振者に関する情報提供があり、その対策について懇談した。 授業料免除や国際交流会館・国際学生宿舎の部屋不足、相談窓口の周知不足などの指摘が外国 人留学生からあった。また、図書館の配架状況で英語専門書が少ないといった意見も出された。 対応について、その可否を検討すると学長から述べられ閉会した。

(第2回)

日 時: 平成21年3月5日(金)16:00~17:30

場 所: 図書館会議室(図書館1階)

出席者: 藤井克己学長、齋藤徳美理事・副学長、高塚龍之理事・副学長、玉真之介理事・副学長、 倉田裕理事・事務局長、中原祥皓監事、大野眞男副学長・国際交流センター長、大塚尚寛 副学長、加藤義男教育学部長

センター運営委員: 菅原正和教授、藪敏裕教授、平原英俊准教授

センター教員: 岡崎正道教授、尾中夏美准教授、松岡洋子准教授、中村ちどり准教授(司会) 事務職員: 中島研究交流部長、松井学務部長、国際課職員

外国人留学生: 朴 京玉、李 真、李 斌、白 蘭、ムハマッド アドリジル イクラム

次 第: 1. 開会 (司会)

- 2. 出席者紹介(司会)
- 3. 学長からのことば
- 4. 懇談
- 5. 閉会 (大野副学長・国際交流センター長)

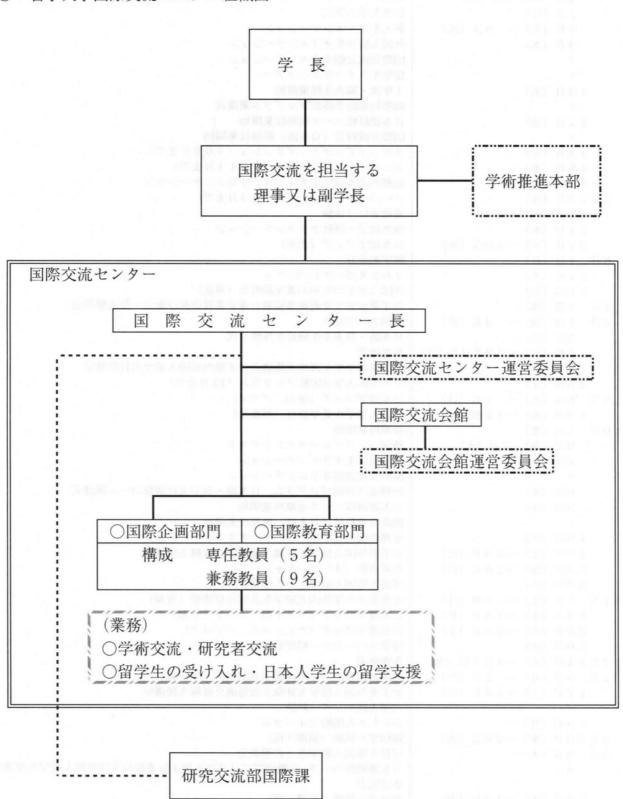
テーマ: 「岩手大学への提言」

内容:本年3月に卒業・修了予定の外国人留学生が参加し、懇談した。まず、学長から前回の懇談会で出された意見への対応として、図書館で学部から推薦のあった英語専門書を配架し始めたとの報告があった。外国人留学生からの意見として、施設面では建物名の英語表示がないことや研究室のスペースの不足、国際交流会館の部屋不足があげられた。また、日本人学生との交流する場の不足なども意見としてあげられた。国際交流センター長から今回の意見を参考にする旨が述べられ閉会した。

岩手大学長と岩手大学外国人留学生代表との懇談会記録

国際交流センター組織図

○ 岩手大学国際交流センター組織図



平成20年度留学生関連行事

			実施	月日	行 事 名
	4月	1日	(火)		学年開始、2年次以上前期授業開始
				~ 9日(水)	4月入学留学生の諸手続き
				9日 (水)	特別コースプレースメントテスト & 国際交流科目オリエンテーション
			(月)		岩手大学入学式
				~ 9日 (水)	新入生オリエンテーション
			(水)	0 11 (7.7)	外国人留学生オリエンテーション
		II II	(114)		国際交流会館オリエンテーション
		"			留学生ライブラリーツアー
			(木)		1年次・編入生授業開始
		11	(/ -		前期短期留学特別プログラム開講式
			(金)		日本語研修コース前期授業開始
	1	"	(717)		国際交流科目(日本語)前期授業開始
	1		(月)		ステップアップイングリッシュ (7月9日まで)
			(水)		スーパーイングリッシュ (7月11日まで)
			(水)		前期外国人留学生チューターオリエンテーション
	5月1				スーパーチャイニーズ (7月3日まで)
			(火)		着物着付け体験
			(水)		海外留学・研修オリエンテーション
				~30日(金)	日本留学フェア(北米)
	6月				開学記念日
			(土)		2008ガーデンパーティ
			(日)		外国人学生のための進学説明会(東京)
	7月				岩手県留学生交流推進協議会運営委員会及び総会・交流懇談会
				~ 4日 (月)	盛岡さんさ踊り
	8 7		(火)	~ 4日(月)	日本語・日本文化研修生等修了式
				~9月30日(火)	夏季休業
			(金)		岩手県留学生交流推進協議会岩手県内外国人留学生社会見学
			(土)		アーラム大学 SICE プログラム (12 月まで)
				~ 7日(日)	日本留学フェア(釜山、ソウル)
	100			~12日(金)	外国人留学生見学旅行(南東北)
1	0月			12 1 (32)	後期授業開始
1	ОЛ			、7日(火)	特別コースプレースメントテスト
				7 1 00	後期留学生オリエンテーション
		"			国際交流会館オリエンテーション
			(水)		短期留学特別プログラム、日本語・日本文化研修コース開講式
			(木)		日本語研修コース後期授業開始
		II II			国際交流科目(日本語)後期授業開始
	1		(木)		後期外国人留学生チューターオリエンテーション
				~19日(日)	岩手県外国人留学生就職支援協議会就職支援講座
				~26日(日)	不来方祭(オープンキャンパス)
			(火)	2 U H (H/	学長と外国人留学生との懇談会
1				~ 3日(月)	北東北3大学外国人留学生合同合宿研修(青森)
1				~16日(日)	日本留学フェア(ハノイ市、ホーチミン市)
				~22日(土)	日本留学フェア(チェンマイ、バンコク)
			(水)		留学生パートナー料理教室
1				~1月7日 (水)	冬季休業
1				~ 7日(水)	外国人留学生スキー研修(安比高原スキー場)
				~18日(日)	岩手県外国人留学生就職支援協議会就職支援講座
	1	"	(1.)	10H (H)	大学入試センター試験
	1	9 日	(月)		がんちゃん国際フォーラム
				~26日(木)	個別学力試験(前期日程)
			(木)		学長と外国人留学生との懇談会
	0 /1	J I	(///)		日本語研修コース・交換留学プログラム修了証書授与及び外国人留学生卒業(修了
					者送別会
	1	12日	(木)	~13日(金)	個別学力試験(後期日程)
			(月)		卒業式・修了式
				~31日(火)	春季休業 (3/31まで)

岩手大学留学生集計表(平成21年3月31日現在)

《種別》

【学部所属】 ()は女子で内数

		0.5		正規	見生	19				81		非正規生	Ē	A)		m_p
学	音	-13		学部	邓生			小	計		研究生		特別聴講学生	科目等履修生	小計	合計
		玉	費	政	府	私	費			国費	政府	私費	私費	私費		171
人文社	会科学	部				12	(6)	12	(6)			1	6 (2)		7 (2)	19 (8)
教育	学音	1 1				1	(1)	2	(1)	20120		7 (5)	10 (7)		17 (12)	19 (13)
工 生	学 音	-13		19	(9)	16	(8)	35	(17)	G CI		3 (1)		EU	3 (1)	38 (18)
農	学 音	73				8	(5)	8	(5)			5 (2)			5 (2)	13 (7)
国際交流	売センター	- 251				RE.				ME I		181		1.1.1		Tu I
合	計	1		19	(9)	37	(20)	57	(29)			16 (8)	16 (9)		32 (17)	89 (46)

【大学院所属】

		正規生						非正規生	. 1	の推移	事事	图 人 阳	48
大 学 院		正况土		小計		研究生		教員研修留学生	特別聴講学生	特别研究学生	科目等履修生	小計	合計
	国費	政府	私費		国費	政府	私費	国費	私費	私費	私費		
人文社会科学研究科			6 (5)	6 (5)									6 (5)
教育学研究科	1 (1)		8 (3)	9 (4)			1					1	10 (4)
工学研究科(M)	1 (1)	1	17 (6)	19 (7)			1				200	1	20 (7)
工学研究科(D)	5		10 (2)	15 (2)							DO F		15 (2)
農学研究科(M)			11 (5)	11 (5)	1				1 (1)			2 (1)	13 (6)
連合農学研究科	18 (6)		21 (9)	39 (15)							160		39 (15)
国際交流センター													
合 計	25 (8)	1	73 (30)	99 (38)	1		2		1 (1)		0.00	4 (1)	103 (39)

※別科、専攻科については外国人留学生の在籍者がいないため、省略する。

【国際交流センター所属】

国際交流センター		玉	費	私費	△ 卦
国际文机ビング	日本語研修	留学生	日本語·日本文化研修留学生	特別聴講学生	08 合計
合 計	3	(3)		0	4 (4)

◆◆留学生総数◆◆

		国 費	政 府	私費	合 計
正規	生	26 (8)	20 (9)	110 (50)	156 (67)
非 正 規	生	5 (3)		35 (18)	40 (21)
合	計	31 (11)	20 (9)	145 (68)	196 (88)

[連合農学研究科配属別内訳]

〈岩手大学 16名、 他大学配属23名〉

/VI 1 / / 1	107	1/ 16		1 11	川马口	11/		
	玉	費	政	府	私	費	合	計
岩手大学	7	(4)			9	(3)	16	(7)
带広畜産大		(1)			5	(3)	10	(4)
弘前大学		(1)			4	(1)	7	(2)
山形大学	3				3	(2)	6	(2)
合 計	18	(6)			21	(9)	39	(15)

[岐阜連合獣医学研究科]

				玉	費	政	府	私	費	合	計
岐	阜	連	獣	1				2		3	
(団	松 口	1. 古書	〒1		33-1	1 1	4	0	- 17 .	1 \	

(国籍別:韓国1、エジプト1、ネパール1

[連大他大学配属分除いた留学生数]

174 (81)

《国籍別》

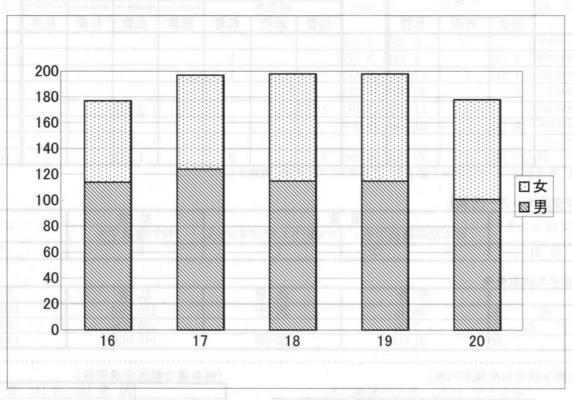
21ヶ国 196人

(ア	'ジ	ア) 12	カ目	国 180	(81)	V	(アメリカ)	4国	6(1)人	(アフリカ) 2	国 5(2)人	(3	一ロッパ)	3ヵ国	5(3)人
国	1751	名	計	国	名	計	٦	玉	名	計	国 名	計	国		名	計
	ドネシ	ア	3	マレ	ーシア	23 (11)	アメリ	カ	3 (1)	シエラレオネ	1		シ	ア	1 (1)
韓	211	国	7 (3)	Ŧ :	ンゴル	12 (9)[アルゼンラ	チン	1	エジプト	4 (2)	+	ルギ	ス	1 (1)
タ		1	3 (2)	ネノ	パール	2	1	ホンジュラ	ス	1			フ	ラン	ス	3 (1)
中	SPI	国	111 (52)	パコ	Fスタン	1 (1	7	ブラジ	ル	1	100				\neg	
スリ	ラン	カ	2				7								\top	
バン	グラデ	シュ	8 (2)	4111			1				1				\top	1
フィ	リピ	ン	4				1				100			W.	\top	
ベー	トナ	ム	4 (1)				1									

過去5年間の男女別留学生数(各年5月1日現在)

年度	16	17	18	19	20
男	114	124	115	115	101
女	63	73	83	83	77
計	177	197	198	198	178

外国人留学生の推移



経費別留学生数

年度	国 費		私費		∌1.
平	国 費	政府派遣	県 費	その他	計
16	43	18	215 0 188 %	116	177
17	46	22	0	129	197
18	46	18	0	134	198
19	46	18		134	198
20	28	20	0	130	178

外国の大学との交流 Academic Cooperation between Universities/Faculties

大学間協定 Universities

国名	VI I Follo	大学等名	初締結年月日	主な交流内容 Contents of Exchanges			
国石 Country	15.19.0007	入子等名 Name of University	First Date of Agreement	学術交流 Academic Exchange	学生交流 Student Exchange		
	曲阜師範大 Qufu Norma	学 1 University	2002. 9. 25	0	0		
	北京大学・ Peking Uni	石河子大学 versity · Shihezi University	2003. 12. 5	0	- 7		
中華人民共和国 People's Republic of	西北大学 Northwest	University	2003. 12. 9	0			
China	大連理工大	学 versity of Technology	2005. 5. 23	0	0		
	吉林農業大学 Jilin Agric	学 cultural University	2006. 10. 3	0	0		
	寧波大学 Ningbo Uni	versity	2006. 10. 28	0	0		
大韓民国	明知大学校 Myongji Un	iversity	2004. 7. 13	0	0		
Republic of Korea		ional University	2006. 8. 23	0			
タイ王国 Kingdom of Thailand	サイアム大: Siam Univer	rsity	2002. 7. 2	0			
ロシア連邦 Russian Federation		ペテルブルグ国立文化芸術大学 burg State Academy of Culture	2000. 3. 28	0	0		
	オーバン大: Auburn Uni	The state of the s	1998. 11. 6	0			
アメリカ合衆国 United States of America	アーラム大学		2003. 8. 11	0	0		
		学オースティン校 sity of Texas at Austin	2004 10 20				
カナダ Canada	The state of the s	アリーズ大学 y's University	2003. 7. 31	0	0		

部局間協定 Faculties

部局名	国名	大学等名	初締結年月日	主な交流内容 Contents of Exchanges		
Faculty in Charge	Country	入子等名 Name of University	First Date of Agreement	学術交流 Academic Exchange	学生交流 Student Exchange	
人文社会科学部 Faculty of Humanities and Social Sciences	フランス共和国 Republic of France	ミシェル・ド・モンテーニュー-ボルドー第3大学 University Michel de Montaigne-Bordeaux3	2007. 7. 6	0	0	
·部 of and	1000 1 10	The transport of the Court of t	SQUEET ST.			
教育学部	A.1. 8801.	北京大学哲学系 (宗教学系) Peking University Department of Philosophy(Religion)	1998. 8. 21	0		
ion 訳	中華人民共和国 People's Republic of China	清華大学中文系 Tsinghua University of chinese Languages & Literature	2000. 12. 15	0	0	
	of China	山東工芸美術学院国際交流与合作処 Shandong University of Art and Design Office of International Exchange and Cooperation	2006. 5. 19	0	0	
	インド India	ジャワハルラル・ネール大学言語・文学・文化研究院 Jawaharlal Nehru University School of Language, Literature & Culture Studies	2006. 9. 28	0		
	イタリア共和国 Republic of Italy	カラーラ大学 Accademia di Belle Arti di Carrara	2005. 10. 5	0	0	

8	アメリカ合衆国 United States of America	ノース・セントラル・カレッジ North Central College	2002. 9. 6	0	0
	カナダ Canada	ブリティッシュ・コロンビア大学 The University of British Columbia	2001. 7. 17	0	
工学家	Canada	西安建築科技大学 Xian University of Architecture and	1999. 6. 25	0	
工学部Engineering	Herosti	Technology 中国科学院蘭州化学物理研究所 Lanzhou Institute of Chemical Physics, Chinese Academy of Sciences	2002. 9. 26	0	
	中華人民共和国	新疆農業大学 Xinjiang Agricultural University	2003. 11. 10	0	0
	People's Republic of China	華南理工大学 South China University of Technorogy	2004. 7. 6	0	Surperi
		新疆大学機械工程学院 Xinjiang University college of Mechanical Engineering	2004. 7. 19	0	
		西北農林科技大学信息工程学院 Northwest A&F University College of Information Engineering	2006. 8. 23	0	
	大韓民国 Republic of Korea	韓国原子力エネルギー研究所 Korea Atomic Energy Research Institute (KAERI)	2006. 1.24	0	
		安東大学校工科大学 Andong National University College of Engineering	2006. 5.1	0	
		ソウル産業大学校工科大学 Seoul National University of Technology College of Engineering	2007. 10. 8	0	
	タイ王国 Kingdom of Thailand	チュラロンコン大学 Chulalongkorn University	2002. 1. 10	0	
1000	n゚ンク゚ラデシュ人民共 和国 People's Republic of Bangladesh	パングプラデジュ工科大学工学部 Faculty of Engineering, Bangladesh University of Engineering and Technology	2003. 12. 23	0	9.75
	モンゴル国 Mongolia	モンゴル国立大学 数学とコンピュータサイエンス学院 National University of Mongolia School of Mathematics and Computer Science	2007. 9.14	0	
	0.5700	モンゴル科学技術大学 通信と情報技術学院 Mongolian University of Science and Technology School of Telecommunications and Information Technology	2007. 12. 18	0	
	フランス共和国 Republic of France	ピエール・エ・マリーキューリ大学 Pierre & Marie Curie University	1997. 4. 19	0	
	ポーランド共和国 Republic of Poland	ポーランド科学アカデミー Polish Academy of Science	1995. 3. 3	0	
農学部 Agricu lture	アメリカ合衆国 United States of America	パデュー大学 Purdue University. School of Agriculture	1996. 4. 4	0	0
連合農学研究科 United Graduate School of Agricultural Sciences Graduate School of Aericulture	カナダ Canada	サスカチュワン大学農業生物資源学部 University of Saskatchewan College of Agriculture and Bioresources	2008. 3. 1	0	

地域連携# Center Collabora and Educa	中華人民共和国 People's Republic of China	上海高分子材料研究開発センター Shanghai Research and Development for Polymeric Materials	2001. 3. 1	0
推進センタ for ation in	大韓民国	慶北大学校トライボロジー研究所 Engineering Tribology Research Institute Tyungpook National University	1996. 5. 31	0
Regional	Republic of Korea	東亜大学校産学協力研究センター Center for Cooperative Research and Development Dong-A University	2002. 3. 25	0

2008年度岩手大学海外派遣・留学プログラム一覧

プログラム名	派遣先	参加資格	派遣国	協定の 有無	目的	単位認 定	派遣時期	派遣期間	個人負担経費	担当学部
*サンクト・ペテルブルグ 交換留学プログラム	サンクト・ペテルブルグ国立文 化芸術大学	人社2~4年 生·院生	ロシア	あり	交換留学	あり	4月又は9月	3ヶ月~1年間	1年間で約70万円〜80 万円	
± == III <i>I</i> V	ブリティッシュ・コロンビア大学 英語研修センター	全学	カナタ゛	なし	英語研修	あり	3月または8月~9 月	28日間	45万円くらい	人文社会科学部
英語研修	モナシュ大学英語研修センター	全学	オーストラリア	なし	英語研修	あり	3月と8月頃	5週間	45万円くらい	
国語科実地研修	国語の教科書に出てくる場所など	教育	中国		現地見学	あり	3月頃	10日間	実費負担	
短期中国語研修	清華大学	全学	中国	あり	中国語研修	なし	8月頃	1ヶ月	20万円くらい	
日本語教育実習	清華大学	教育	中国	あり	日本語教 育実習	あり	3月頃	2週間	20万円くらい	教育学部
*短期派遣	清華大学	教育	中国	あり	交換留学	あり	8月頃	1年間	生活費	864837
*短期派遣	曲阜師範大学	教育	中国	あり	交換留学	あり	8月頃	1年間	生活費	SHEET SHEET
*短期派遣	ノースセントラルカレッジ	教育	米国	あり	交換留学	あり	4月又は8月	1年間	生活費	1 1 1 1 1 1 1
*短期派遣	吉林農業大学	農学	中国	あり	交換留学	あり	8月頃	1年間	約24万円	農学部
国際研修	モナシュ大学英語研修センター	工学部2・3年	オーストラリア	なし	英語研修	あり	8月頃	4週間	33万円くらい	工学部
パデュー大学学生派遣	パデュー大学	農学	米国	あり	交換留学	あり	8月頃	1ヶ月	625ドル 旅費は農学部より若干補助	農学部
*短期派遣	明知大学校	全学	韓国	あり	交換留学	あり	9月頃	半年以上1年以 内	生活費	人文社会科学部
*短期派遣	テキサス大学	全学	米国	あり	交換留学	あり	8月中旬	1年間	生活費	
*短期派遣	アーラム大学	全学	米国	あり	交換留学	あり	8月中旬	1年間	生活費	国際交流センター
*短期派遣	セント・メアリース・大学	全学	カナダ	あり	交換留学	あり	8月中旬	1年間	生活費	
*短期派遣	寧波大学	人社·教育	中国	あり	交換留学	あり	8月	1年間	生活費	教育学部
∗ボルドー交換留学プログ ラム	ボルドー第3大学	人社2~4年 生・院生	フランス	あり	交換留学	あり	9月より	5か月~1年間	年80万~90万円	人文社会科学部

注: * 表示のプログラムは協定校との交換プログラムなので、岩手大学で授業料を払えば、派遣先での授業料免除の適用を受けます。認められれば月額8万円の奨学金を受けられる場合があります。休学した場合は、単位認定は受けられません。

平成20年度海外学生受入·派遣実績(学生交流協定締結校)

12.4	担当音	8局	受け入れ	li .		104	派遣	
40.0	人文社	t会科学部	フランス	3	08	フランス	3	
100			ロシア	1		中国	STORY OF BUILDINGS AND STREET	
			韓国	2		韓国	1	
	教育学	兰部	中国	8	100	中国	4	
WE.			アメリカ	2		アメリカ	The second services but his hard and the second	
W III	工学部	ß	TETO DE	16	1284	ENAI	医原子 电放射性加速性	
19.8	農学部	ß	中国	1	10.14	中国	condition of areas person	
2,5,5	国際交	を流センター	11175-17		10	- aga	THE ROPLET - LOS	

岩手大学外国人留学生地域派遣実績一覧 2008年度

	派遣依頼機関	派遣日程	交流 者数	派遣留 学生数		交流の内容
1	日本語交流室「じょい」(盛岡市)	4月	不明	6	エジプト(1)、中国(3)、バングラデシュ(2)	文化体験
2	地球市民の会(盛岡市) 平泉町国際交流協会(平泉町)	4月19日	50	16	中国(9)、ネパール(2)、ロシア(2)、キルギス(1)、ベトナム(1)、モンゴル(1)	文化体験
3	北上市立黒沢尻東小学校「うで組」(北 上市)	5月31日、7月26 日、27日、10月18 日	60	6	韓国(2)、ロシア(2)、キルギス(1)、フラン ス(1)	文化体験
4	盛岡国際交流協会(盛岡市)	7月12日	多数	25	中国(10)、韓国(3)、ネパール(3)、ベトナム(3)、バングラデシュ(3)、マレーシア(3)	異文化理解
5	NPO法人「もりおか中津川の会」(盛岡市)	7月26日、27日	多数	9	中国(2)、バングラデシュ(2)、ネパール (2)、モンゴル(2)、ベトナム(1)	異文化理解
6	石鳥谷国際友好基金(花巻市)	7月27日	40	3	中国(3)	異文化理解
7	日本語交流室「じょい」(盛岡市)	7月	不明	6	エジプト(2)、中国(2)、バングラデシュ(2)	文化体験
8	緑が丘一丁目地区町内会(盛岡市)	8月23日	16	1	マレーシア(1)	スポーツ交流
9	東松園小学校(盛岡市)	9月2日	49	2	中国(2)	異文化理解
10	都南老人福祉センター(盛岡市)	9月28日	多数	7	中国(3)、モンゴル(4)	異文化理解
11	日本語交流室「じょい」(盛岡市) 上田公民館(盛岡市)	9月	不明	2	バングラデシュ(2)	異文化理解
12	西和賀町教育委員会(西和賀町)	10月9日、16日、 23日、30日、11月 6日	100	5	中国(2)、ベトナム(1)、韓国(1)、マレーシ ア(1)	異文化理解
13	岩手県高等学校文化連盟(岩手県)	10月17日	30	9	中国(5)、フランス(2)、ロシア(1)、バング ラデシュ(1)	文化体験
14	盛岡市見前地区公民館(盛岡市)	10月17日	15	1	韓国(1)	異文化理解
15	中津川アースデイマーケット実行委員会 (盛岡市)	11月2日	多数	18	中国(6)、モンゴル(4)、マレーシア(3)、ネ パール(3)、バングラデシュ(2)	異文化理解
16	盛岡女子高等学校(盛岡市)	11月6日	115	7	フランス(1)、韓国(1)、キルギス(1)、 モンゴル(2)、マレーシア(2)	異文化理解
17	杜陵小学校(盛岡市)	11月7日	44	2	韓国(2)	異文化理解
18	滝沢村教育委員会(滝沢村)	11月8日、15日、 22日、29日	20	2	ベトナム(2)	異文化理解
19	東松園小学校(盛岡市)	11月11日	56	2	韓国(2)	異文化理解
20	城北小学校(盛岡市)	11月17日	45	5	中国(3)、モンゴル(1)、アルゼンチン(1)	異文化理解
21	見前南小学校(盛岡市)	11月18日	45	1	ベトナム(1)	異文化理解
22	MOSSビル(盛岡市)	11月22日~24日	多数	32	中国(13)、韓国(2)、モンゴル(4)、ベトナ ム(4)、マレーシア(5)、バングラデシュ (3)、ロシア(1)	異文化理解
23	フレンズ国際愛児園(盛岡市)	11月28日	28	1	モンゴル(1)	異文化理解
24	東松園小学校(盛岡市)	12月1日	58	1	マレーシア(1)	異文化理解
25	東松園小学校(盛岡市)	12月1日	51	1	ロシア(1)	異文化理解

岩手大学外国人留学生地域派遣実績一覧

2008年度

	派遣依頼機関	派遣日程	交流 者数	派遣留 学生数		交流の内容
26	東松園小学校(盛岡市)	12月2日	65	1	ベトナム(1)	異文化理解
27	永井小学校(盛岡市)	12月16日	61	(1)	タイ(1)	異文化理解
28	MORIOKA 3rings合同会社(盛岡市)	12月21日、23日	不明	2	中国(1)、米国(1)	文化体験
29	日本語交流室「じょい」(盛岡市)	12月	不明	2	中国(1)、バングラデシュ(1)	異文化理解
30	牧の林すずの音保育園(滝沢村)	1月15日	75	3	中国(3)	異文化理解
31	鵜飼保育園(滝沢村)	1月15日	31	3	中国(3)	異文化理解
32	岩手県立美術館(岩手県)	1月16日	10	10	中国(7)、韓国(1)、フランス(1)、ロシア (1)	文化体験
33	教育学部特別支援学校(盛岡市)	1月19日	19	6	中国(6)	文化体験
34	ハレルヤ保育園(滝沢村)	1月27日	27	3	中国(3)	異文化理解
35	盛岡ユネスコ協会(盛岡市)	1月30日	不明	13	中国(10)、韓国(1)、ロシア(1)、パキスタン(1)	文化体験
36	盛岡女子高等学校(盛岡市)	2月5日	149	5	フランス(1)、韓国(1)、モンゴル(1)、中国(2)	異文化理解
37	仁王小学校(盛岡市)	2月6日、17日	67	3	米国(1)、中国(2)	異文化理解
38	北上市立黒沢尻東小学校「うで組」(北 上市)	2月14日	49	2	中国(1)、ロシア(1)	異文化理解
39	盛岡市立大慈寺小学校(盛岡市)	2月16日	38	1	中国(1)	異文化理解
40	盛岡市立城南小学校(盛岡市)	2月19日	74	1	中国(1)	異文化理解
41	紫波町立水分小学校(紫波町)	2月26日	101	11 1	モンゴル(1)	異文化理解
42	日本語交流室「じょい」(盛岡市)	2月	不明	4	中国(4)	文化体験
43	日本語交流室「じょい」(盛岡市)	3月	不明	7	中国(7)	文化体験
	合計			238	** N. T. TRUEY A. T. IX	100

執筆者一覧

岡崎正道(Masamichi Okazaki)

尾中夏美(Natsumi Onaka)

松岡洋子(Yoko Matsuoka)

中村ちどり(Chidori Nakamura)

早川智津子(Chizuko Hayakawa)

岩手大学国際交流センター教授(教育部門長)

岩手大学国際交流センター准教授(国際企画部門長)

岩手大学国際交流センター准教授

岩手大学国際交流センター准教授

岩手大学国際交流センター准教授

岩手大学国際交流センター報告 IUIC 第 5 号

2009年7月発行

IUIC 5, Bulletin of Iwate University International Center

July 2009

編集·発行

岩手大学国際交流センター

〒 020-8550 岩手県盛岡市上田 3 丁目 18番 34号

Tel 019-621-6290 / Fax 019-621-6297

Iwate University International Center

3-18-34, Ueda, Morioka, Iwate, Japan

Tel +81-19-621-6290 / Fax +81-19-621-6297

Bulletin of Iwate University International Center



Iwate University International Center